

---

# 永遠に葬れ

灰神楽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠に葬れ

### 【Nコード】

N9873G

### 【作者名】

灰神楽

### 【あらすじ】

光が有るなら闇があり、表が有るなら裏がある。“生”にしがみつく者が居るなら“死”にすがり付く者も居る。“生”の世界から追放された者達が集う楽園。それが『闇黒隔離』あんこくかくり。この世界には『同情』も『常識』も要らない。再び訪れる“最期”まで踊り続けるだけ。“理想郷”を目指す者達の願いと想いの物語。

## プロローグ

『壊し屋』と、そう呼ばれる組織がある。

薔薇と王冠の紋章に忠誠を誓い、政府ですら一目置いていた先鋭組織。

その組織の若き指導者を畏れ、人々……否、屍達は彼をことう例えた。

“まるであの『幻葬』のようだ”と。

ACT・00 オワリノヨルノハジマリ(前書き)

流血表現あり。

ACT・00 オワリノヨルノハジマリ

「断る」

抑揚の無い声音が部屋に響く。

だが、その声は人影と対座している青年ではなく、その傍らに立つ男のものである。

「どうしてだ！ 今人不足だと聞いたから……」

「聞こえなかったか？ 断る、と言った」

間髪入れずに男は淡々と言い放つ。

男を宥めるように右手で制止し、ソファにもたれている青年はようやく口を動かした。

「……要するに、だ。お前みたいな覚悟の無い奴はこの組織には要らないって事」

瞬間、青年の薄い胸ぐらは人影に掴まれていた。

「ふ……ざけるなっ おれがどんな思いでここまで来たと思ってるんだ！」

「さあな。オレの知ったことじゃない。この組織に必要なのは理想郷に残る覚悟のある者のみだ」

人影の手が青年の首を締め付け始めた。が、首を締め付けられて尚、青年は笑みを浮かべている。

「どうした？ 早くその手に力を込めればいい」

まるで他人事のように言い放つ綺麗な声音はどこか異国のもの  
よう。

「こゝのまま、あんたを殺してもいいのか」

「できるものなら」

青年の首を締め付ける腕が仄かに蒼く光り始めた。 反射的に得  
物をとる男を眼差しで制し、青年は相手を見据える。

「……………つ。その腕…………… 契約 か」

それはこの世界に、『アイツ』に、認められた証。

それはこの“ゲーム”に参加する為の切符。

「ああそつだ。おれはこの腕でたくさん魂を喰ってやった。あん  
たの魂も喰い破つてやる。前のあいつらみたいにな」

青年は涼やかに口元をつり上げた。

「……………本性、見せたな」

そつ言い放つた、瞬間。

「馬鹿が」

その声は誰のものだったか。

書類の吹雪とともに人影から右手が消えた。否、あらぬ方向へと飛び散った。

紅い水滴と共に。

「あ……あ……」

一瞬にして人影の表情は驚愕に染まった。

「……お前はひとつ、勘違いをしているな。オレ達『ローズロイヤル』はそんなに甘くはないんだよ」

人影は床にのたうちまわりながらも、青年の足元にすがり付く。

「……た……すけてくれえ……死にたくない……っ」

必死の哀願すらも、青年は冷笑ひとつで切り捨てる。

「『死ぬ』……？ それは“生きている”モノに使つ言葉だろう？」

もうとつくに命なんてものは一度散らしてる。

それはお前もオレも同じだろう？

オレ達は……“動く死体”

『屍』なんだから。

「これがオレとお前の『覚悟』の差だよ。お前は今オレを畏れた……」

その時点でお前の負けだ」

既に虫の息である人影の耳元に屈みこみ、

「……消え失せる。雑魚」

部屋内断末魔の叫びが響き渡る。

青年は人影を見下ろし、さも愉快げに笑った。

彼の左瞳はまるで、紅い宝石を埋め込んだような赤。

彼の体を取り巻く漆黒の鎖がじゃら、と音をたてる。

それでも綺麗な声音が変わることは無く。

「じゃあ、報酬の受け取りと後始末は頼んだから。後よろしく」

対して相手の男は露骨に嫌な顔。

「たまには自分でやったらどうだ、横暴リーダーが」

「…疲れた。後で事務室にコーヒー運んで。ブラックで」

小さく舌打ちをする副リーダーの横をすり抜けてひらひらと手を振りつつ、青年は扉を閉めた。

事務室。

「…まったく、最近はあるな輩ばかりだな。ただでさえゴタゴタして  
るっていうのに…」



スーツの上着をかなぐり捨て、青年はソファに倒れ込んだ。仰向けのままゆっくりと目を閉じ、束の間の眠りに落ちるよう。だがそれは騒がしい電話の音に見事妨げられる。

運悪く傍にあった受話器を不承不承手に取り、耳へ当てた。綺麗な声音は、出し惜しみするかのように今は掠れていて。

「……はい？ こちら『ローズロイヤル』。依頼内容は短く、簡潔に、尚且つ分かりやすく。オレの機嫌を損ねたら即打ち切りだ。……ん？ ああ、名乗るのを忘れてた」

暗闇の中、禍々しい程の紅がゆらりと煌めく。

「オレは祈響<sup>ききょう</sup>。『ローズロイヤル』のリーダー、祈響だ。よろしく依頼人」

さあ、始めようか。

理想郷に残る為の“ゲーム”を。

ACT・01 虚空の祭壇

「死体卿？」

愛用の黒いソファに腰掛け、机に足を乗せたまま、祈響は訊ねた。

“死体卿”を名乗る男を抹殺せよ”

それが政府から下った今回の依頼内容だ。

「…それで？ その死体卿とやらは何をしでかしたんだ」

「執行人に連れられた死体を法外な報酬で引き取り、実験の糧にしているらしい」

所詮他人事、とでも言うかのように、零<sup>ぜろ</sup>は淡々と続ける。

「加えて、相当な屍を殺してる」

「……だろうな。報酬は？」

「三千万」

「男一人の抹殺にしては随分と高価な額だな」

政府の関係者か、もしくは…

「いい加減机から足を下ろせ、と睨むような表情で告げる副リーダーの台詞に渋々足を下ろしつつ、祈響は笑った。

「…分かった。今回はオレとお前、それと…あいつで行くとするか」

「あ、おはようございますっ。リーダー」

「ああ、おはよう」

「リーダー。この書類なんです」

「ああ、零にでも渡してくればいい」

ふ、と微笑んで団員達とすれ違い、向かうのは黒地の扉。

「……由良<sup>ゆら</sup>、居るか？」

きろり、と藍色の瞳がこちらに向けられた。その両手には大事そうにスケッチブックが抱えられている。

「依頼？」

祈響は、ああ、と頷く。

スケッチブックに描かれた丸みを帯びた字は、彼女の唯一の交流手段だ。

「今回はオレと零も行くから。心配しなくていい」

軽く頭を撫でてやると、由良は静かに頷いた。

「よし。準備出来たら来な。部屋の外に居るから」

薄暗い森を抜け、爪先上がりの坂道を上りきつたところに、件の洋館はある。

どこことなく古城を思わせる建築様式。

鋭く尖る屋根。古びた煉瓦の壁には苔がむし、蔦や茨が這いまわっている。

窓硝子の奥は深い闇。今のところ気配は感じられない。

つい、とスーツの裾を引っ張る感覚に祈響は足を止めた。

「……どうした？ 由良」

「誰か居る」

一体誰が、と訝しむ間もなく、ひたひたひた、と常人では聞き取れないであろう、ひそめた足音が近づいてくる。

「まったく……」

はあ、とため息まじりの息を吐き、祈響、零、由良はそれぞれ敵からの攻撃を避ける。

「随分と手荒な歓迎だな」

器用に中指で眼鏡を元の位置へ戻しつつ、零が呟く。

「これはこれで楽しめそうだと思うけどな」

面白い、と祈響は不敵に笑う。

「丁度良い。死体卿とやらの居場所を吐け。原型を留めていたいならな」

相手は猛襲の手を止めない。

「教えないなら道を空ける。空けないなら……」

何処からか、雷鳴がする。

「……壊すぞ」

石造りの古びた螺旋階段を降りていく。

「地下室か」

零が呟いた。

鍵は掛かっていないらしい。だが、そこからは微かな灯りが漏れていた。

最後の一段を降りて、影の如くその部屋に入った。  
静寂。

ひやり、と冷たい手に肌を撫で上げられるような心地がして、身が心なしかすくむよう。

天井から吊るされたシャンデリアに、蝋燭を思わせる照明がいくつかが灯っている。

地下礼拝堂のような、空間。

正面にある複雑に入り組んだ機械はまるで教会の祭壇のようだ、と思うところでふと照明が消え、辺りは暗闇に抱かれた。

何も見えない。影さえも、闇に吸収されてしまっている。

この場合、瞳を開いていたところで何の役にも立たない。そう判断し、祈響は瞳を閉じた。

神経を研ぎ澄まし、視覚以外の感覚を鋭敏にする。

漆黒の闇。

雷鳴。

何者かの息遣い。

移動する音。

ひとつふたつと増える気配。前後左右、天地…殺気はあらゆる方向から感じられる。

初めは左横。

祈響は屈んで避ける。空気を裂く音からして、鋭利で長い爪のようなものに繰り出されたらしい。

二歩後退し、斜め前に跳ぶ。

すぐ真後ろで風が唸り、銀色の髪がなびく。

「数撃てば当たる…か。愚かだな」

攻撃をかわしつつ、祈響はフ、と笑い、契約を解いた。

『ブラッディ・サイレンス』

彼の体が一瞬紅い光を帯び、漆黒の鎖が闇の中で蠢く。

やがて、ひとつの燭台にだけ灯がともった。

ゆらりと陽炎のように映し出される人影がひとつ。

ヒタ、ヒタ、ピチャ……と不気味な音する。

まるで、獣が仕留めた獲物の血を啜り、肉を喰らうような。

ひやりと冷たさが幾分ましたよう。

「雑魚ばかりだな。この程度で神様気取りか？」

ひとつ、またひとつ、と息を吹き返したように多くの灯火が戻った。

「そんな事はない。君たちが圧倒的なのだよ」

シルクハットにタキシードというまるでマジシャンのような出で立ちの“死体卿”は不気味に口元を歪ませる。

「実に興味深い。調べ尽くして更なる力として加えてみたいものだ。私の最高傑作“裁断者”の力に」

余韻を残すように発せられた言葉は、背後から振り下ろされた大剣によって掻き消される。

「！」

片腕　右腕の感覚が無い。

否、右腕自体が己から切り離されている。

「裁断者はこれまでの実験結果を元を選びすぎり100体もの筋繊維を基盤の死体に移植した、敢えて言うなら機能強化型でね」

最新にして最強の屍だ、と勝ち誇ったように“死体卿”は笑う。今度は薙ぎにくる大剣を一瞥し、祈響は口元をほころばせた。

「機能強化型ねえ…雑魚でも籠りきって研究してれば一体位はマシなのも出来るか」

だが、と祈響は鼻で笑う。その瞬間、振りがざされたはずの大剣が粉々に砕けた。

死体卿と裁断者の表情が徐々に驚愕へとすりかわる。

「コイツは最新でも、ましてや最強でもないな」

祈響は己の左目に手を翳す。空気が一段と冷たさを増した。

揺れる銀糸の間から垣間見えるのは

粉々に砕けた大剣を冷やかに一瞥し、“裁断者”を見つめるのは鮮やかな紅の瞳。

諭えるならばそれは錬金術師が用いたと言う血色の石のような。

視る者全てを魅了し、そして同時に畏怖を抱かせるような。



禍々しい瞳に見据えられ、裁断者はその巨体に不似合いな弱々しい声音で呟いた。

「…………バ…ケモ…ノ…」

肯定するように、血色の眼を輝かせる銀髪の青年は口の端を持ち上げ笑った。

「なんだ？ 今頃気付いたのか」

途端、世界は激しい閃光と共に“時間”を止める。

雷鳴が鳴り響く。

「ひいッ…や、止めてくれ…………逝きたくない…………っ」

悲鳴じみた声を上げ、“死体卿”は、たちまち椅子から立ち上がろうと試みるが、かなわない。

幾千にもおよぶ針が椅子と死体卿とを繋ぎ止めているのだから。

「動かないで。無理に動けば四肢が千切れるから」

傍らの柱には小柄な藍色の髪の少女。

「…ほどいて…頼む…金でも、邸でも…欲しいものなら何でも…  
…だから…ッ」

ほどいてくれ、と哀願するが別の声音に遮られる。

「…馬鹿が」

抑揚の無い声。吐き捨てるように呟いた零はおもむろに自身の得物である古文書を開く。

### 『滅亡童話』

記された文字が仄かに深緑の色を帯びる。

「ケルベロス」

呼応するように空気が刹那、震える。

闇が形どつたように現れたのは、魔獣。

獅子の体に、蛇の尾。鰐の眼に、犀の鼻面。たてがみは虫のよう  
にうねり騒ぎ、其処から絶えずポタリポタリと血が滴る。

「…さあ、どうして欲しい？ このまま魔獣に喰われるか、それと  
も…」

床から切り離された己の右腕を拾い上げ、事も無げに接合すると、  
美貌の青年はゆっくりと死体卿へと近づいていく。

後方には魔獣、前方からは銀髪の青年。

すると、死体卿は何かに気付くような顔付きで、

「銀色の、髪？ …… 銀の …… お …… おまえっ ……」

死体卿は銀髪の青年を仰ぎ、わなわなと唇を震わせ呟いた。

“幻葬”と。

「 …… ふーん、アイツを知ってるのか。それじゃあ政府の目に留まるのも無理はないな」

「あ、れは、架空の …… とっくに ……」

とっくに居ないのだろう、と震えながら言う死体卿の目前で、祈響は足を止める。

「それなら、冥土の土産に良いものを見せてやるよ」

くすり、と笑い、青年は銀髪をかきあげる。

“死体卿”は嫌々をするように首を振り、四肢が千切れるのも構わずに手を伸ばし、哀願した。

まるで許しを請う子供のように。

まるで助けを請う子供のように。

だが、もう遅いのだ。

血色の眼が妖しく光る。

「初めて見るだろ？　これが　……」

死体卿は声すらも上げる事無く　否、上げる事が出来なかったのだ。

目の前に佇む銀髪の青年。その左瞳。

禍々しく、それでいて酷くこちらを魅了させる。

赤薔薇の如く美しく、同時に荊の如く鋭い　…

正真正銘の“幻葬の瞳”

「アイツが『架空』だったのは昔の話だよ」

さて、と祈響が笑った。

「そろそろ“神様ごっこ”も幕引きにしようじゃないか」

雷鳴が一際大きく響いた。

「神には役不足だ。地獄に転職するんだな」

そう笑う声音は酷く、冷たい。

死体卿の胸ぐらを掴んだかと思うと、

「喰え、ケルベロス」

後方に控えている魔獣に声をかけた。

「…他人の魔獣に無断で命令するな、祈響」

「なら、今断っておくよ」

造作もなく、祈響は死体卿を持ち上げた。

「……行け、ケルベロス」

儼然とした面持ちのまま、零が呟いた。

稲妻と断末魔の叫びが混ざり合い、地に墜ちる。

「ゲームセットだ。死体卿とやら」

\*\*\*

「なかなか良い雷だったな」

そう呑気に微笑むリーダーに零は半ば呆れたため息をついた。

「……お前な。こんな雑魚ごときにだらだら時間かけてるな、馬鹿」

「興味深い話ではあったよ」

反省の色など微塵も見せない祈響に、零は再びため息だ。

「……ったく、お前もいい加減危機感を覚えるよ」

「そんなもの、“理想郷”に辿り着く為には必要無いだろ？ とにかく、これで依頼は完遂。後は政府の奴等に任せるとするか」

行くぞ、と促して、銀髪の青年は踵を返す。

さあ、幕は上がった。

ACT・02 “呪”の名を持つ者

闇黒隔離中央地区。

『ローズロイヤル』 通称『壊し屋』と呼ばれる組織の事務室である。

ガラガラ、ゴトン、ガシャン、とけたたましい音の直後にその扉は開かれた。

「祈響ッ」

呼ばれた銀髪の青年は、迷惑そうに眉をひそめソファの上で寝返りを打つ。

「……………何だ、零……………騒々しい」

「お前な！ 俺に黙って勝手に依頼を受けるなど言っただらうがッ」

「もう少し声のボリュームを下げろ……………うるさくてかなわない……………痛ッ」

何を言っても無駄だったようで、八つ当たりとばかりに脳に鈍痛を覚えさせられた。

ようやく祈響は起き上がり、既に怒りのメーターを振り切っている副リーダーに問いかける。



「たまには同胞の意見も必要だと思ってな。……それとも、依頼の善し悪しでオレが動くとも言いたいのか？ 零」

零は内心舌打ちした。ただでさえ最近は何奇現象じみた依頼が多い。それを全てこの横暴リーダーが面白半分で引き受けてくるのだから困ったものだ。

それを見透かしたかのように、祈響は続けた。

「闇黒隔離中央地区。とある廃墟で突如悲鳴とも聞こえる慟哭が響いた。偶然にも視察に来ていた『雪月花』が駆けつけるも屍の姿は無かった。

その後、その廃墟は『屍喰い』と揶揄され、今も尚、定刻になると呪文のような言葉と共に屍が忽然と姿を消す”……なかなか面白いだろ？」

零はため息をついた。

コイツはいつもこうだ。まるでゲームのように怪談話めいた依頼を面白半分で引き受けてくるのだ。本当に厄介なのは“違法”とみなされる屍より目の前の青年なのではないかという錯覚さえ覚えざるをえない。

「……馬鹿、デメリットを考えろよ。大体、そんな怪談話めいた依頼を引き受けているほど暇じゃない。政府の依頼じゃないならさっさと断れ」

「…へえ、随分と偉そうな事を言うようになったな。この組織の“指導者”は誰だと思ってる？」

寝起きだとは思えない腕力で零の胸ぐらは易々と掴み上げられる。

「オレに逆らうな」

唸るような祈響の声音に、その眼光に、零は背筋がゾクリと粟立つのを感じた。

「……………化け物が」

ポツリ、と呟かれた文句に祈響はフ、と笑う。

「よく言われる」

祈響は零から手を離すとソファに再び座った。

厄介な依頼だ。そう思いながら、零は仕方がなく依頼内容の書か

れた書類に目を通し始めた。

\*

「…零。どう思う？」

暫くの沈黙の後、祈響が切り出した。

「“違法屍”がその廃墟を根城としていることは間違いない。定刻に屍が消える事と呪文のような言葉が聞こえる事から考えると、おそらく相手は極小だが群れだろうな。……それに一体以上は“呪い憑き”がいる」

不本意だ、と言わんばかりの声音で零は言う。

「“ノロイツキ”って何？」

すらすらと慣れた手つきで紙面に綴られる文字。

ああ、と祈響が微笑する。

「由良は初めて聞くのか」

祈響は一旦瞳を伏せ、思案する。

“呪い憑き”

強大な『妄執』を物理にまで影響させる事が出来る、違法屍の中でも最も特異で厄介な部類に入る。

先鋭集団と揶揄されるこの組織でさえ、手こずる相手であることは変わらない。

「呪いには個々の特性が出やすいからな……能力の特定は無理そうか？」

「ああ、そうだろうな」

「殺害方法の特定も？」

「ああ、そうだろうな……おい、ちょっと待て。何で殺される事が前提なんだ」

別に、と祈響は立ち上がる。

「訊いてみただけの事だ……行くぞ、二人とも。現場を見に行く」

「…騒ぎになったにも拘らず随分と無用心だな」

『屍喰い』と揶揄される廃墟の手前で祈響は呟いた。

零は廃墟を仰いだまましばし無言。

「……零」

「何だ」

「怖いなら戻って待機でも別に構わないが」

くす、と祈響は微笑。

「そんなわけ無いだろ。第一、お前らだけに任せておけるか。どうなるか分かったもんじゃない」

「…ははっ。その考えには同感」

同感だと祈響は渴いた笑いをこぼす。

零は儼然とした面持ちでため息だ。

「おい…いつまで笑っているつもりだ。少しは緊張感持て。馬鹿」

「『危機感』の次は『緊張感』か？ いつからそう教育熱心な母親みたいになっただんだ、零」

「……お前な」

「冗談だよ」

フ、と不敵に笑って祈響は廃墟の陰に姿を消した。由良も続く。

「…化け物の分際で『冗談』か……馬鹿馬鹿しい」

吐き捨てるように呟くと、零も廃墟の陰に掻き消えていった。

ひらり、と舞うのは黒死の蝶。

カッン、カッン、と階段を上る靴音だけが響く。  
と、

「ッ急に止まるな。何が ……」

「声がする」

零の言葉を遮って、祈響は低い声音で言った。

立ち止まったのは、最上階。辺りにもう扉は無い。此処が最奥なのだろう。

「此処だな」

銀髪から覗く紅の左眼が獲物を見つけた獣のように刹那、煌めく。

祈響は薄く笑った。

「……行くか」

\*

赤く煌めく炎がユラ、と揺らいだ。

「…ねえ、次はどうしようか」

ひとつの影が語り掛けるように口火を切る。

ひとつふたつと影がざわめき、嬉々の声をあげ始める。

「大丈夫よ、絶対に逝ったりしないわ。だってアタシたちは ……」

刹那、空気を切り裂く鋭い音。  
嬉々の声が悲鳴に変わるのも束の間、

「屍相手に奇襲と先制攻撃は基本中の基本。まずはリーダーを狙うのも、な」

くすくすと嘲笑を浮かべ、美貌の青年は銀髪を煌めかせ淡々と言葉を紡いだ。

その左の瞳は、見つめる者にただ畏怖を与えるかの如く、紅い。

「あ……その紋章……こっ『壊し屋』ッ」

ひとつの影が後退る。

「『壊し屋』ねえ……お前らには負けるよ、違法屍共」

じゃら、と己の得物を弄び、祈響は笑う。

狂ったように叫び刃物を振りかざす影をチラと血色の瞳で一瞥するど、

「……『ブラッディ・サイレンス』」

彼を取り巻く漆黒の鎖がまるで命ある者のようにつねる。

「……あと、ふたつ」



静かに告げられる“終焉”。

魔獣の咆哮が響き、紅が散り、黒が翻り 再び静寂が訪れた。

カツン、と乾いた靴音が一段と響いた。

残るひとつの影は驚愕に染まったままわなわたと唇を震わせている。

「い…嫌…もう、し、死にたくない…せつかく…せつかく『生まれ変わった』のに…助けて…助けてよ…早く…」

刹那、影が目を剥いたかと思うと、空気がざわついた。ゾクリ、と肌が粟立つ。

「！」

その光景に血色の瞳が僅かに見開かれる。

高らかな笑いと共に影が 消えた。

「…どうということだ…？」

リーダーを潰されて尚、器用に此方の攻撃を避けた残った一人。

由良の得物によって捕らえられていたはずのその屍は跡形もなく、床には鮮やかな紅い華が散るだけだ。

祈響は視線を部屋の僅か奥 階段 へと移した。

「…この上は…屋上だな。零、先にアイツを追いかける」

獲物であるあの屍を追いかける、と。  
言われて零は至極冷淡な声音で、

「…命令するな。この横暴リーダーが」

「依頼に『緊張感』を持ってと言ったのはどこのどいつだった？」

「……ッ」

「…頼んだぞ」

「……今回だけだからなッ」

\*

「由良、大丈夫か？」

大丈夫か、と問われ、由良は弱々しく頷いた。

「何があった」

少女はペンを走らせる。

「ものすごい力で引きちぎられた」

俯く少女の髪を優しく撫で、祈響は微笑む。

「気にするな。…立てるか？」

由良は頷いた。

一方。

零は前方に行く屍を深緑の瞳で見据え、舌打ちした。

(……たく、馬鹿げてる。何が『頼んだ』だ。あの我儘リーダーが)

もう一度舌打ちすると、自身の得物である古文書『滅亡童話』を開く。

「ちょこまかとウザイ奴だ…『ナベリウス』！」

古文書が刹那“契約”の光を帯びる。

冷え冷えとした夜風を纏い舞い上がったのは漆黒の鴉。

黄金の眼が影を捉え、獲物を狙う狩人のように急降下する。

やがて、屍が進むことを止めた。

「ひ、い…あ……」

わなわなと唇を震わせるそれに、

「口を塞げ…耳障りだ」

至極冷淡に、そう言い放った。

だが逆に屍は饒舌になり、鴉に裂かれた傷に見向きもせずただ喋る。

「…痛い…どうして？　こんなに…血が、いっぱい…生まれ変わったら、誰も私を傷付けられないはずなのに…ねえ、どうして？」

“ドウシテ？”

「!？」

先程と同じだ。ゾクリと肌が粟立つ、この感覚。

その瞬間、零の体は宙を舞った。

「なっ」

ビリ、と空気が震えたかと思うと、その刹那零の体は空に舞う。

「なんで…こんなに血がいっぱい…痛い、痛いよ…」

屍は鈍く光るナイフで 自らの腕を切り落とした。

“ イタイ、イタイヨ ”

零の体が地に着いた瞬間、『滅亡童話』が音を立てて滑り落ちた。

「何…だと…?!」

得物を所持していた右腕が紅に染まる。だがそれだけではない。まるでナイフに裂かれたように切り落とされているのだ。

( どうなってる! ? 相手に触れてさえないのに… )

まさか。

「 ひゃ、はっ…あ、はははっはははっ 」

「 ……ちッ 」

零は舌打ちした。

( 二いつ… “ 呪い憑き ” か……ッ )  
「 ……ちッ 」

零は舌打ちした。残る左手で此方に向かってくる相手の腕を掴み、振りかざされる刃物をすんでのところで止めるも、受け止めた体が軋む。思った以上に負荷が大きい。

高らかに笑う“呪い憑き”を深緑の瞳で睨み、零は思案する。

この状態では『滅亡童話』は使えない。更に、下手に相手を窮地に追い込めば自分も“死ぬ”ことになるだろう。

だが突如、ピタリと相手が動きを止めた。その視線は自分の背後に当てられている。

と 刹那、空気を破る音。次いで、よく響く美声が夜風を吹き抜ける。

「 『ブラッディ・サイレンス』 」

銀色の髪。

漆黒の鎖。

紅の瞳を携え、美貌の青年は笑った。

「へえ……お前が“呪い憑き”か……」

漆黒の鎖が刹那“呪い憑き”を捉え宙を舞う。それを血色の瞳で見やり、祈響は得物を引いた。

耳障りな音と共に“呪い憑き”は地に着いた。

「…体に直接傷が出来なければおまえらの“能力”も無に等しいらしいな」

クス、と微笑して祈響は淡々と言った。

受け身すらとることが出来ず地に着いた“呪い憑き”は忌々しげに歯ぎしりすると、影のように再び走り出した。瞬く間に遠くなくなっていく屍を一瞥し、祈響は零の方を見やる。

「それにしても、まあ、なんとも無様な格好だな。零」

「うるさいッ。元はと言えばお前が」

そう言いかけて、止めた。

馬鹿馬鹿しい。この横暴リーダーには何を言っても無駄なのだ。

「……もういい。さっさと奴を追っぞ」

「そつだな。……由良、零とここに居ろ」

祈響は自分の背後にいる藍色の髪の少女に声をかける。由良は軽く頷くとペンを走らせた。

「わかった」

「お前何を」

「傷」

何を言っている、と訝しげな表情の零の言葉を遮り、祈響は指摘した。

“呪い憑き”に何らかの方法で切り落とされた腕。

「結構深いんだろ？」

この世界の住人は皆高度な治癒力を持っているが、それでも得物を持てるほど回復はしていないのだらう、と告げる。

「……馬鹿言つな。大した怪我じゃない」



「ふーん？」

祈響は笑うと零の胸ぐらを易々と掴み軽々と 投げ飛ばした。

不意を突かれ、零の体は受け身をとることなく地に着いた。

「何の真似だッ」

「受け身も取れないくらいに弱ってる奴がよく吠えるな。由良、しつかり見張ってるよ?」

「うん」

「馬鹿ッ アイツは呪い憑きだ。お前独りで」

「『勝てると思っっているのか』…か?」

祈響は薄く笑う。

「……勝算は」

「無いとでも？」

その自信は何処からくるのだ、と言わんばかりの表情の副リーダーを見やり、祈響は二、と微笑んだ。

「……死体に戻ったら承知しないからな、祈響」

背を向けるリーダーに零はポツリと一言。

対して当の本人は優雅に微笑み、銀糸を夜風になびかせた。

「当然」

\*

「……残ったよ……私だけは……だから、待ってるから……私達が『生まれ』場所……たったひとりの味方の……あなたを」

カッン、と夜風に響いた靴音に“呪い憑き”は振り返る。

「…逝く前の言葉はそれだけか？」

息ひとつ乱さず、美貌の青年は立っていた。

「また邪魔するの…？ 生まれ変わった私は…あの人との約束の場所へ…だから…」

ビリ、と空気が震える。

「邪魔……しないでええええッ！」

殺意を剥き出しにして向かってくる呪い憑きを目前に、祈響は冷笑をひとつこぼした。

「お前に此処以外に居られるところなんて存在しないんだよ。  
“理想郷”へ辿り着くのはオレ達だ」

青年を取り巻く漆黒の鎖が蠢く。

「…………消える」

骨の軋む音。ぽたりと落ちる紅い雫。

「…………いたい…痛い…痛いよ……………」

“呪い憑き”は子供のように呻く。

祈響は薄く笑うがその腕からは地に落ちる紅が滴っていた。

それは“呪い憑き”と寸分変わらぬ箇所。

「……成程ね。痛みを『共有』と言うわけか」

己の受けた直接的な痛みを対象者へ強制的に数倍にして返す。

“肉を切らせて骨を絶つ”と言うわけだ、と祈響は唇を歪ませる。

「馬…鹿……ね…私は死なない、わ…死ぬ、のは、あなたのほう…」

心ここに在らずの表情で言葉を紡ぐ“呪い憑き”を前に、祈響は  
淡々と告げた。

「オレは死なないさ。どんな事であろうと、『アイツ』がいる限り、  
な」

血を払い、美貌の青年は笑う。

「 覚悟しろ。残念だが、お前はとう足掻こうと“天国”には逝けないらしいぞ」

闇が銀糸を揺らす。青年は己の左目に片手を翳した。

「ウチの同胞を喰った罪は重いぞ？ “呪い憑き”」

祈響は一旦眼を伏せる。

紅血の海に沈む。

浸入する、紅。

溺れる。

フ、と再び開かれた瞳は                      より紅く、紅く。

「…終わりだ」

氷のような声音が、終焉を告げる。

漆黒の鎖が、まるで命あるもののように、うねる。

交錯。

咆哮。

翻る。

ナイフ。

紅い月。

漆黒の鎖。

闇。

静寂。

祈響はゆつくりと口元の血を拭った。  
体を痙攣させながら呻く呪い憑きを血色の瞳で一瞥する。

「……………」

ズキン、と鈍い痛みを伴いながら、左目が疼く。生き血を求める  
獣のように。

“欲しい”

“血が欲しい”

“お前の血が欲しい”と。

「悪いがもう少し大人しくしてもらおうか……？」

自嘲めいた口調で問い掛けるのは、別の鼓動を刻む左の瞳。

まるでそこだけが別の存在であるかのように、青年の動悸とは別の鼓動を刻み続けている。

だが刹那、唐突に目の前の“呪い憑き”が苦悶の表情を浮かべ己の喉元に手を伸ばした。

「あ、があ……あ」

喉元を自ら絞め始め　　耳障りな慟哭を最期に動かなくなった。

まるで、石化したかのように。

まるで操り糸のきれた人形のように。

「……死体に……戻ったのか……」

“もとあるべき”姿に。

そしてこの“楽園”を追放され遅かれ早かれ“執行人”によって闇に葬られるのだ。

かきむしられた喉元は紅く、最期の苦痛を物語っている。

「……………送ってやれなくて悪かったな」

祈響は静かにそう呟き、事切れた“呪い憑き”の元に屈みこむ。

そこでふと気付く。

「……………これは……………」

事切れた“呪い憑き”の紅く染まった首のあたり。刺青であろう紋章がかいまみえる。

「……………蝶……………」

それは蒼空に舞う華。

不意にヒラ、と頬をすり抜けた“本物の”それを片手で掴み、祈



響は冷笑を浮かべる。

粉々になった蝶々を手のひらから夜風に放ち、立ち上がった。

「…なかなか小賢しい真似をしてくれるな」

銀糸をかきあげ、冷ややかな声音でそう呟くと、零達が居るであろう廃墟へと踵を返した。

\*

ほどなくして、夜が明けた。

「……奴は」

「ああ…お前の仇はバツチリとつてきてやったよ」

零の問いに薄く笑い、祈響は由良と共に階段を降りる。

最後の一段を降りたところでふわりと銀糸が揺れた。

「…だが、この“ゲーム”には観客が居るようだ」

「観客？」

「それも随分と悪趣味な趣向の持ち主らしい」

「…何が言いたい」

懽然として問う副リーダーを振り返り、祈響は僅か血色の瞳を細めた。

「…この依頼は…まだ終わっていない」

ACT・03 死は我が踊り手（前書き）

流血表現注意。

ACT・03 死は我が踊り手

「…どうするつもりだ、祈響」

どうするのか、と問われ、祈響は銀糸をかきあげた。

「夜も明けた。一旦戻って仕切り直しといこうか」

行くぞ、と促し、祈響は歩み出す。

「……？」

その後ろ姿をしばし見つめ、零は妙な“違和感”を感じた。

「零？」

こちらを見上げ、ペンを走らせる少女。

「傷、痛むの？」

不安げに文字を紡ぐ由良に「問題無い」と告げ、零はその藍色の髪に軽く触れた。

「一雨来そうだ。早く戻らないと風邪ひくぞ、由良」

踵を返し歩み出す零の言葉に由良は頷いた。

ひらりひらりと、蝶は舞う。

「零、ウチの書庫に有るだけの昆虫図鑑を事務室に運んでくれるか」

「はあ!？」

組織に戻って来るなり突拍子も無いことを言い出したリーダーに零は思わず聞き返す。

「いいから、昆虫図鑑。至急」

有無を言わせぬ口調でそう言つと、祈響は銀糸を揺らし一人事務室へと姿を消す。

「まったく…何なんだ、あいつは」

こちらを見上げてくる由良に「先に戻ってる」と一言告げ、零は踵を返した。

\*

「案外早かったな、零」

我関せずの表情で愛用のソファに座る祈響の目前に書物を積み上げ、零は眼鏡を押し上げた。

「…至急と言ったのはお前だろう。…大体、こんなものを何に使うんだ」

怪訝そうな声音にフ、と笑いかけ、祈響は一冊を手取る。そして、静かに言った。

「“蝶”の住み処を探すのさ」

「蝶？」

「そう、蝶々。あの呪い憑きの首にそれが刺青として印されていた。まるで神の生け贄のようにな」

もつとも本物の“神”ではないだろうが、と祈響は苦笑する。

「他に誰がいるの？」

「おそろくな」

まだ憶測の域を出ないけど、と微笑んで、祈響は続ける。

「要するにあの呪い憑きはいわば試作品。土から“人間”を造り出した“神”と同じように、死体から擬似的に動き、且つ自我を持つ屍を造り出す…かの古代神官のような奴が今も優雅にこの空を飛び回ってるって事」

いつかの“死体卿”と同じようなものさ、と銀糸をかきあげ、祈響は頁をめくる。

「あれより夕チが悪い」

無然とした副リーダーの呟きに祈響は乾いた笑いをこぼす。

「はは、同感。だが同胞がその試作品に喰われたとあっては黙っている訳にもいかないだろ？」

そつだろつ？ と問われて零は言葉を詰まらせた。

ふと血色の瞳で窓の外を仰ぎ、祈響は冷えた声音で笑う。

「我らから逃れられると思うなよ。“蝶”風情が」

今は悠々と蜜を吸っているといい。

お前が何処に隠れようと我らの鼻がお前を嗅ぎ付ける。

我らの爪がお前を切り裂く。

ただその時まで夢に酔うがいい

ひらりひらりと、蝶は舞う。夢華に誘われて。



半数ほど書物を読破したところで、祈響がふと顔を上げた。

「零」

「…何だ」

「コピー」

「…それくらいでいちいち人の名前を呼ぶな」

「なんとなく。ブラックでいいから」

それだけ言うと再び視線を落とし“蝶探し”に没頭するリーダーに、零は浅いため息をついた。

派手な事をやったかと思えば突拍子もないことを言い出し、雑務的な事まで顔色ひとつ変えず行う目前の青年。

それは静かに、けれど確実に獲物を仕留める鷲のようで。

「……………馬鹿馬鹿しい」

ポツ、と呟かれた文句も青年の耳には入っていない様子。  
コーヒーを机上に置き、零は内心舌打ちする。

程なくして、青年の頁をめくる手がピタリと止まった。

「……………見つけた」

ひらりひらり、と蝶は舞う。夢華に惑い、紅に魅入られて。

祈響は図鑑を閉じ、口元をほころばせる。

「見つかったの？」

「ああ。どつやら相当な“かくれんぼ好き”らしい」

首を傾げる由良に微笑して、祈響は放り投げてあった上着を羽織

り、血色の眼を爛々と輝かせる。

「行くぞ。零、由良。“鬼”が動かないとかくれんぼもただの独りよがりだ」

\*

祈響が立ち止まったのは、かつて『屍喰い』と恐れられた廃墟。

「昨日の場所？」

「そう。此処が他ならぬ“蝶”の住み処だ」

ひら、と舞い降りてきた蝶々を指先に止まらせ、祈響は微笑する。

「……どういう事だ」

「『ローズロイヤル』きつての“頭脳”なら朝飯前だろ？」

どこか感じていた“違和感”。

蝶の刺青。

凶鑑の意味。

“かくれんぼ”

…

零は舌打ちした。気付くのが遅すぎる。

「頭が良いのは認めるがもう少し柔軟に考えた方が良くぞ、零？」

あからさまにからかいの笑みを浮かべ、祈響が言った。

「…年中柔軟に考えすぎのお前に言われる筋合いは無い」

不意に2人の会話を聞いていた少女が少々不満げにペンを走らせる。

「二人だけ分かっててずるい」

「ははっ。悪いな、由良。結論は零に聞いてくれ」

な？ と同意を求められ、零はため息まじりに告げる。

「……この『屍喰い』と恐れられた廃墟は最初から“存在しなかった”と言っことだ」

「そう。要するにオレ達は踊らされていたって事。この蝶々と、この廃墟にまわりつく“磁気”のおかげでな」

「“磁気”？ この場所が“磁場”だったこと？」

「当たり。 ……まあ、自然に出来たものじゃないけどな」

「でも、“磁場”だって気付いたら近付かないんじゃないの？」

この世界で“猛毒”とも揶揄される“磁気”。それに自ら踏み込む屍などおそらく居ないだろう。

「そう。毒と知って自ら踏み込む馬鹿はそう居ない。だが、もしそれに“気付けなかった”としたら？」

由良は閃いたようにペンを走らせた。

「無意識に自分から毒に入る…」

「そついつこと」

祈響は笑って指先の蝶々を見つめる。

「…そして、その最後の仕上げとして使われたのが、コイツだ」

「蝶々？」

「この蝶の名は『Hallucination』。直訳は『幻覚』だ。その名の通り全ての感覚を狂わせ時には幻をも見せるそうだが、集団となればその幻はより現実的になり、やがて…」

「……本物と同等、もしくは本物以上の“幻”となる」

祈響の言葉を憮然として零が紡いだ。

「つまりこの『屍喰い』と言われた廃墟そのものが“幻”。だが、その事実気付かせず猛毒とも言われる磁気に屍を誘い、弄んでいる“蝶”は此処にいる」

幻の解けた後に現れるであろう“ただの”廃墟にな、と祈響は銀糸をかきあげる。

「さて、行こうか。マジックショーもそろそろ幕引きだ」

祈響は廃墟へと足を踏み入れた。

以前とは違い、天井にはところせましと蝶々が息づき翅をはためかせている。

「さて、コイツらには即刻退場してもらわないと困るな」

祈響は薄く笑って銀糸をかきあげる。

「零」

「分かっている」

零は自身の得物を開く。

「 『ナベリウス』 」

深緑の“契約”の光と共に漆黒の羽をはためかせるのは大鴉。

「…殲滅しろ、ナベリウス」

“主”の命令に、大鴉は飛び立つ。

紫に煌めく翅が舞い、地に堕ちる。程無くして、鴉の啼き声と共に羽ばたきが降りてきた。

刹那、万華鏡のように情景が歪み、そして霧のようにかき消える。

祈響はフ、と口元をほころばせると奥に広がる闇へと視線を向けた。

「……………」

そのまま闇に、笑う。

「…もう“かくれんぼ”は終わりだぞ」

“鬼”であるオレ達がお前の居場所を見つけたのだから、と祈響は奥の闇に笑いかけた。



僅か空気が震え、“闇”が唇を開く。

「ノックも無しにヒトの家に入ってくるなんて…不法侵入だよ？  
お兄さん達？」

コツ、と靴音を響かせて闇から“ヒト”の形に切り取られる輪郭。  
それは口元だけ僅か歪んでいた。

「だったらノック出来るように扉のついた部屋にするんだな」

祈響は薄く笑う。紅の眼が鈍く煌めいた。

「ひどい事いうねえ。…まあ良いや。お兄さん達、エンターテイナ  
ーとしては最高に面白そうだから」

にこり、と笑って闇から姿を現した少年は続ける。

「初めまして。ボクはノア。こっちは可愛いボクの『作品』」

初めまして、と微笑する少年。いや、“笑って”いるのは口元だけ  
だが。

『作品』と呼ばれた屍はピタリと少年に寄り添っている。  
その首筋にはあの“呪い憑き”と同じく蝶の刺青が刻まれていた。

「可愛いでしょ。お兄さん達もそう思わない？」

ボクの一番のお気に入りなんだ、とノアは笑う。

「生憎だが人形を弄ぶ趣味は持ち合わせていないんだ」

祈響は涼やかに口元をつり上げる。

「そう」

にこり、と少年が笑うと同時に『作品』が動く。

だが振りかざされた刃物が青年に届くことは無く、深緑の瞳をわずかに細めた副リーダーに遮られていた。

「…ウチのリーダーに気安く近付かないでもらおうか」

言って、零自身が内心舌打ちした。反射的とはいえ何故いつも自分はコイツを庇ってしまうのか。自分に腹が立つ。

刃物を持った手を腕ごと掴まれている『作品』の瞳が刹那少年に  
向き、それに答えるように少年は軽く頷いた。

「良いよ、相手してあげて。せつかく役者が足を運んでくれたんだ  
もの…最高の喜劇になるよね」

パチン、とノアが指を鳴らした。途端、闇からひとつ、またひとつと屍が湧き出てくる。

「どう？ ボクの『作品』達もあの死体卿と同じ…いや、それ以上の出来映えだよ」

自分達を包囲するように群がる『作品』を見やり、祈響は紅の瞳に冷笑を浮かべた。

「…悪趣味にも程があるな」

何百と群がる『作品』達を前に、祈響は笑う。

「…『ブラッディ・サイレンス』」

透き通るような声音に応じるように刹那彼の体が“契約”の紅い光を帯びる。

具現したのは漆黒の鎖。

チラ、と銀糸から覗く紅の眼で副リーダーを見やり、祈響は口元を  
つり上げた。

「せいぜい同じ所に深手を負わないように注意するんだな、零」

対して、零は掴んでいた腕を刹那引き、バランスを崩した相手を  
壁際まで突飛ばして冷ややかに言う。

「馬鹿言うな。そんなへまはしない」

ふ、と微笑して、祈響は背後の少女に声をかける。

「援護頼むぞ、由良」

少女は頷く。

それを確認すると青年は銀糸を揺らし、『作品』の奥に佇む少年  
を見据えた。

「さあ…ゲームスタートだ、少年」

「『マルコシアス』」

抑揚のない声音が古文書に紡がれた文字を告げた。呼応したように現れたのは翼ある狼。その口元からは蒼い焰が吐き出されている。

向かってくる『作品』を深緑の瞳で一瞥すると、零は冷ややかな声音で、自身の得物を操った。

「……雑魚が」

刹那たじろぎ、今度は少女へと標的を移す『作品』達。だが、彼女達は知らなかった。

その選択によって 『ローズロイヤル』リーダーに背を向けてしまった事を。

「…ウチの可愛い補佐に何の用だ？」

だが、もう遅い。

クス、と笑い、祈響は銀系をかきあげる。  
現れる紅の眼。それは禍々しく煌めく、“神”の瞳そのもの。

「伏せろ、由良」

そう笑う声音が、終焉を告げる。

「  
…余興は幕にしようか」  
刹那。

世界が紅に染まり、刻を止める。

瞬間、包囲していた『作品』達が散った。跡形も無く。

祈響は薄く笑って靴音をひとつ、響かせる。

対して、少年は口元にだけ笑みを浮かべ、言った。

「…流石だね。だけど…ボクはその瞳を手に入れて新しく生まれ変わるんだ。醜いサナギから、美しい蝶に…」

恍惚と何かにとりつかれたように呟く少年に、祈響は嘲笑する。

「自覚が有るのは結構だが……寝言はもう一度“死んで”から言え、少年」

「何？」

少年は刹那表情を強張らせる。

嘲笑う声音のまま、青年は続けた。

「蝶々気取りもいところだな。だが、甘い戯れ言ばかりを吐き散らかし“此処が光だ”と何も知らずに飛び交う様は…蝶ではない、醜い蛾そのものだ」

ただ冷たく、それでいて針に糸を通すように正確に発せられる言葉。

「ッ違ッッ」

せせら笑う青年を前に少年は声を荒げた。

「ボクはあの“幻葬”さえ届かぬ蝶になる。神と言っても全能じゃ

ない。全てを操れやしないッ」

「…『アイツ』なら、やれるさ。他人の心を見透かし思うままに踊らせる。『アイツ』はどうすればお前が期待通り動くか知ってる。お前以上にお前の事を知ってるよ」

盤上の駒を操る騎手のようにな、と祈響はなおも笑った。

「そんな事、奴に出来るもんかッ　ボクはボクだッ」

「まあ、それは正論だな。お前はお前でしかない。しかし…」

祈響は一旦言葉を切り、紅の眼で少年を見据えた。

「その“お前”という存在をこの世界に確定させたのは他でもない  
“神”である『アイツ』だ」

淡々と言葉を紡ぐ青年に少年は唇を震わせ、「違う」と独り言の  
ように幾度も呟いた。

だが刹那、その声音が嬉々としたものに変わる。

「そうか…そうだよ。奴が“神”なら、ボクも同じ力を手に入れれ



ばいいんだ。最初の目的とはちょっと違っちゃうけど……」

唐突に外の天候が変わり、雨音がひびき始める。

「ねえ、お兄さん……ボクにその“瞳”……早く頂戴？」

雨音を遠くに聞き、少年は笑う。

「ねえ、頂戴？ ボク、赤いモノが大好きなんだ。でもこんなにキレイな紅は初めて見たなあ」

にこり、とノアが笑った、刹那。

地面から鈍く光る物体が蠢いた。

「……“契約”か」

首をめがけてきたそれに、祈響は眩き己の得物を拮抗させる。鈍い金属音が刹那響き、バラバラと碎けた物体が地に落ちた。

それは濡れ羽色の有刺鉄線。

「そっか、ボクとお兄さんの契約って似てるんだね。でもボクの“

契約”は…」

一度言葉を切り、少年は微笑。

「…まるで鋭い刃物のように相手の首、切れるんだよ」

「当たれば、の話だろう？」

くす、と笑う青年に少年は口元にだけ笑みを浮かべた。

「そうなんだよねえ。此れがなかなか当たらないんだ。だから…  
…“ボク”は蜘蛛も利用しようと考えたのさ」

「……！」

四肢が動かない。否、“動かせない”と言った方が適切だろうか。

暗闇に紛れ張り巡らせてあったのであろう少年の“契約”。先程見せたのは言わば“罠”と言うわけだ。

「無理に動かそうとすると体が千切れちゃうよ。気を付けてね、お兄さん」

「……本来自身が捕らえられる筈の“蜘蛛の巣”までも利用するか  
…“蝶”風情が」

冷やかに笑う青年に近づき、ノアは猫なで声じみた声音で青年の頬に触れ呟く。

「もつたいないから…お兄さん、このまま剥製にしてあげようか。  
あ、でも…その“眼”はもらわなきゃ」

必要不可欠だからね、と笑ったノアに祈響は鼻で笑う。

「…はッ。欲しければくれてやるよ。お前に覚悟と力量が有るのならな」

出来るものなら、と祈響は薄く笑みを浮かべた。

ノアは刹那笑みを消す。けれどすぐに満足げに口元を歪ませ、青年の血色の瞳へと指を伸ばす。

紅い紅い、華が咲いた。

「キレイ…これがあの“幻葬”の…すごい、本当に真つ赤だ…っ」

手のひらの中にある“それ”をうつとりと見つめ、新しい玩具を手にした子供のようにノアは無邪気に笑う。

“それ”は青年から切り離されて尚、まるで自身が呼吸しているかのように息づいていた。

「これでボクは生まれ変わるんだ…醜い殻を捨てて、美しい蝶々に！  
もう誰にも邪魔なんて」

させない、と言い終える前に、ゾクリと肌が粟立つような感覚に体を支配される。

「っっっ！？」

途端に胸を押さえたかと思うと、少年は激しく咳き込み、苦しんだ。

耳には恐ろしく冷たい声音が響いて聞こえる。

“還せ”

“還せ”

“一つに戻せ”と。

その声音は 手のひらのなかから。

脳の奥深く 否、身体中を支配する、酷く冷たい声。  
一度だけ。たった一度、聞いた。

そう。

“神様”なんて噂されている、

唯一の存在。

「……………幻……………葬……………」

「……………愚か、だな」

不意にかけられた言葉に、少年は反射的に声の主を振り返る。

闇に紛れることの無い銀の髪。

青年はその美貌にわずか冷たさを含み 微笑していた。

揺れる銀糸。

青年は涼やかに口元を歪ませている。

「大人しく“幻葬”の頭上を飛んでいれば良いものを…」

銀糸からこぼれる押し殺した笑い声 嘲笑。

ノアは僅か後退る。

「どうした？ 何をそう畏れる」

オレの“切り札”はお前の手のひらにあるだろうか？ と残る右瞳で少年を見つめ、なおも冷笑をこぼす青年を前に、ノアは悲鳴を上げた。

「ば、化け物ッ」

「…そんな言葉…今までに五万と言われてきたんでね。“化け物”  
“冷血” “非道” …皆が揃いも揃って同じ事を言う」

笑えるよ、と祈響は口元をつり上げる。

「さあ、言いたい事はそれだけか？」

くす、と青年が笑った刹那、彼を縛りつけていた有刺鉄線がまるで弾かれるかのように 解けた。

解けた少年の“契約”を残る漆黒の右目で冷ややかに一瞥し、青年がス、と片手を上げた。

びくりと体を強張らせた反動で少年の手のひらから“紅の華”がこぼれおちる。

だがそれが、地に着くことは無く。

その光景にノアは絶句した。

自らの手のひらから舞い落ちた紅い華。

それは何の抵抗もなく　ただ吸い寄せられるように青年の左目に収まった。

まるで、そうである事が当然だと言うかのように。

左瞳からおもむろに手を離し、『壊し屋』のリーダーは笑う。

「生憎『コイツ』は“飼い主”を選ばらしい。残念だったな」

狂ったようにノアは自身の“契約”を振りかざす。だが、対して青年は口元に冷笑を浮かべたままそれを弾くように漆黒の鎖を操った。

何故。

少年の脳内に、ふと疑問が浮かび上がる。

自分では駄目なのか。力量不足だとしても、いつのか。

否、初めから分かっていたのだろう。

初めから、目の前の相手に、試されていたのだ。



“力”と“想い”。

比例するそれは、この世界の“すべて”。

「くそっ…『マリア』ッ、『グロリア』ッ………何で“答えない”ッ」

「そいつらが居ないからさ」

狂ったように自身の『作品』を呼ぶ少年に、祈響は笑う。

「……どうやらウチの敏腕助手の方が、一枚上手のようだ」

何百、否、何千といた『作品』はひとつ残らず 破壊されていた。

深緑の瞳を眼鏡の奥で煌めかせる男と、その傍らに控える藍色の髪  
の少女によって。

「…さて、そろそろ此方も幕としようか」

“人形劇”も終わったようだからな、と青年は笑う。

コッ、と靴音をひとつ響かせ少年に歩み寄ると、その胸ぐらを掴みあげ「そういえば」と冷たい声音で囁いた。

「：貴様は“観客”だったな。随分と舞台を引っ掻き回してくれたものだ：“蝶”風情が」

フ、とこぼされる冷笑。      その手が放された刹那。

紅い華が咲き誇り

“蝶”は塵と化した。

それは、圧倒的な“力”。

“想い”がある故“願い”が生まれ、“力”となる。

たとえ其れが、どんな結果をもたらそうとも。

青年は差し出していた手を握り、得た“何事か”を確かめるかのようにふと眼を伏せる。

フ、とその口元に笑みがうかぶと同時に瞳を開き、背後の人影に声をかけた。

「ナイスタイミング。零、由良」

絶妙なタイミングだったよ、と笑う祈響に零は至極冷淡な口調で応じる。

「……借りをつくるのは嫌いなんだ。此れでチャラだからな」

「ああ、そうだな」

〔祈響。怪我、酷い〕

「大丈夫だ。幸い傷は浅いようだから」

くす、と微笑して祈響は踵を返す。欠伸をひとつ、噛み殺して。

「さて、これで依頼完遂だな。早く戻って一眠りするでしょうか」

\*

『ローズロイヤル』 事務室。

青年の規則正しい寝息とせわしなく動くペンの音だけが、部屋に

響いている。

「……………」

やがてペンが止まり、男が立ち上がる。眼鏡の奥の深緑がチラ、と青年を見やり、けれど、扉を開けて男は姿を消した。

刹那訪れる、暗闇。

ふと、青年の瞳が開かれる。

漆黒の右。紅の左。

青年の唇から、ポツリと呟かれる“言葉”。

「……………」

それは空気と同化し闇に吞まれた。程なくして、青年の瞳が再び閉じられた。

“欲しい”

声がる。

“ お前の血が欲しい” と。

“ 欲しい”

『 アイツ』 の、 声がする。

“ お前が欲しい” と。

ACT・04 暗き静寂

目覚めた最初の記憶。

“やあ、はじめまして”

温かった。

そこから先の記憶は無い。

もう一度、目を開けた時には。

「祈響」

「……なんだ、零。安眠妨害もいいところだぞ」

闇黒隔離中央地区。

『ローズロイヤル』事務室で愛用のソファに寝そべる青年は、あからさまに不満げな文句を吐いた。

銀糸から覗く血色の瞳をチラ、と横に平行移動させ、突き出すように手渡された書類の束を見つめる。

「…政府から、か」

面白みもあつたもんじゃないな、と青年は仰向けのまま無造作に書類をめくる。

と。傍らに置いてある電話が騒がしく鳴き出した。

「…零、取って」

「お前の方が近いだろうが」

「取ってオレに渡してくれば良いから。ほら、早くしないと依頼が逃げる」

促され零が渋々受話器を取ると、ようやく電話は鳴ることを止める。

「…はい、『ローズロイヤル』…ああ、あんたか。……ははっ 生

憎「こちらは寝起きなものでね。…で、要件は？」

血色の右目がゆらりと煌めく。

「……………良いだろう。勿論、好きなようにやらせて貰っけどな」

くす、と笑って事も無げに電話を切る祈響に零は怪訝そうな表情のまま、

「…また変な依頼を受けたんじゃないだろうな」

「残念ながらハズレ。政府からの緊急要請だ」

行くぞ、と上着を羽織り、青年は“壊し屋”の象徴である王冠と薔薇が刻まれたネクタイを締める。

「『聖域』ね…なかなか興味深い」

程なくして送られてきた依頼状をさして興味無さげに一瞥し、祈響は零に行くぞ、と促す。

入れ替わりに事務室に姿を現した少女にふと微笑して、



「由良、悪いが留守番頼むぞ」

「分かった。いつてらっしゃい」

藍色の髪を撫で、祈響はよろしくな、と告げた。

「……良いのか」

「…政府の“我が儘”に由良を巻き込む訳にもいかないだろう？」

緊急要請。

政府にとって厄介且つ面倒だと判断された依頼。言わば世界の“歪み”を正す為の出動である。

鬱蒼とした森の中。

「……平和になったものだな。こうして歩いていても誰ひとり襲い掛かって来ないとは」

つまらない、と祈響は欠伸を噛み殺しながらぼやく。

先程から視界の隅には違法の屍であろう影が飛び交っているが、決して彼の視界を遮ろうとはしない。否、出来ないのだ。

蝶々が驚を畏れるように。

“人間”が“神”を畏れるように。

誰もが畏怖を抱く“幻葬”。

神とも謳われる存在の寵愛をその身に受ける美貌の青年。

“幻葬”と同じく血色の瞳を輝かせるその姿に、更なる畏怖と蔑みの意を込め、屍達は呼ぶ。

“化け物”と。

けれど、祈響はその状況を楽しんでいるかのように微笑する。

と。

「おいッ お前ッ」

息を切らし、こちらを呼び止めたのは。

「……………見る、零。勇敢な奴がいたぞ」

まだ幼い雰囲気を拭い去れず、木の棒を握りしめるその姿さえも違和感を感じさせない少年だった。

「こっ、ここから先はおれたちの村だッ 部外者は入るなッ」

精一杯の強がりなのだろう。睨むように向けられた大きな瞳は固い決意を携えていた。

「……………なんだ、このガキ」

「ガキじゃないッ おれにはコウタっていうちゃんとした名前があるんだッ」

少年 コウタは木の棒を振り回すが、刹那速く零の手に頭を掴まれ反抗はかなわない。

「放せ眼鏡ッ おまえらなんか居なくても、もうすぐあの『ローズロイヤル』が来ておれたちの村を助けしてくれるんだッ」

「だから俺達が」

その『ローズロイヤル』だ、と零が言う前に、祈響が口を開いた。

「ほう。それは凄いな。オレ達も是非一度お目にかかりたいものだ」

唐突な言葉に、零は思わず少年の頭を掴んでいた手を放す。

「だろ！？ きつとすっげーカッコいいおっさん達がくるんだぜっ」

ぱあっと自慢気に目を輝かせる少年の頭上に零が「誰がオッサンだ」と拳を見舞った。

「何すんだこの眼鏡ッ 弱いものイジメをする奴は悪い奴だって、じいちゃんが言ってたんだぞ！」

「自慢するな、ガキ」

「ガキじゃないッ」

少年と副リーダーのやりとりを見やり、祈響は肩を揺らして笑う。

「「笑うなッ」」

丁度取っ組みあっていた二人の声が重なった。

ひとしきり笑った後、祈響は少年の元へと屈み込み、

「『ローズロイヤル』の奴らには敵わないかもしれないが…オレ達も戦う力を持つてる」

少年は半信半疑の表情で祈響と零を交互に見やる。

「……ホントに？」

「ああ。お前の村を救う力になれるかもしれないぞ」

村を救う、力。

それを聞いた少年はぎこちない動きながらも案内してくれるよう。  
こつちだぞ、と歩き出した少年の後に続こうとする祈響を零は引  
き留めた。

「…何故あのガキに正体を隠した」

自分達が『ローズロイヤル』だと明かさない理由は、と問われて、  
祈響は笑う。

「気まぐれ」

「……は？」

呆気にとられる零に祈響は続ける。

「事は言い様、物は使い様、だろ？」

くす、と不敵な笑みを浮かべ、祈響は踵を返す。

揺れる銀糸を暫く見つめ、零も歩み出した。

ため息と共に、ぽつりと眩きながら。

「……お前と関わるとロクな事がない」

\*

風化し、文字すらもかき消されている看板を通りすぎ、より深緑の森に足を踏み入れる。

重く、暗い森。何かに呑み込まれたような、そんな錯覚を覚える。

刹那、空気が揺れた。

「……来たな。“子供”が無防備に歩いていけば放っておく輩は居ないと思っていたが」

“子供が”と。

祈響は口元を涼やかにつり上げ笑う。

魂魄の微力な屍は時折そう擲掬される。外見の年齢は関係ない。ただ“力”の強さ。

此れだけが、この世界のすべてなのだから。

フ、と祈響が笑うや否や、物陰から物体が跳躍した。木の葉がざわめき、空気が震える。

少年を標的と定め、ニタリと不気味な笑みを浮かべるそれを、一瞬速く赤い閃光が遮った。

漆黒の鎖。

銀の髪から覗く、紅の眼。

「  
」

刹那『それ』は何かを発し けれど、音になることはなかった。

その表情は畏れそのもの。

その表情は恐れそのもの。

それを悠々と見下す孤高の鷲。



蠢く漆黒。

刹那の悲鳴さえ赦さず、再び静寂が訪れた。

呆気にとられ、その場に座り込む少年に手を差し伸べ、祈響は笑う。

「……信じる気になったか？ 少年」

鬱蒼とした森を抜け、おもむろに少年が指を差した。

「……ここが、おれたちの村だよ」

「……随分と静かだな。客人の姿に誰ひとり無反応とは」

「……昔は」

少年は俯き呟いた。

「昔は、もっと明るくてみんな楽しそうだったんだ。でも……」

「でも?」

「…前の村長が居なくなってから、みんな変わっちゃったんだ。人形みたいに、今の村長の言いなりになって……」

「……なるほどな」

政府からの緊急要請。  
依頼状とまるで違う村の様子。

村の長が代わり、何かしらの圧力をかけているのだとすれば合点がいく。

「……よし、少年。お前の話が聞きたい。家に案内しろ」

「え？」

「おい、祈響ッ」

話が違つ、とひき止める零に微笑みかけ、祈響は言った。

「高みの見物を決め込む村長になど、興味はない。村人たちも役に立ちそうに無いからな。少年、お前の話を聞く」

いいな？ と有無を言わせぬ口調に少年はぎこちなく頷いた。

「……不満か？ 零」

「……どうせ言つても、聞きはしないだろう」

微笑を浮かべるリーダーに零は冷ややかに言った。  
まあな、と祈響はふと空を仰ぐ。

「……だが今の村長に謁見を申し込んだところで何も解決しないだろっね」

おそろくな、と祈響は血色の瞳を細め、笑った。

「ほら、早く来ないと迷子になるぞ、零」

\*

「邪魔するぞ、爺さん」

入り口の低い扉をくぐり、祈響は声をかける。

白髪の老人はおもむろに振り向き、刹那目を丸くした。

「……これはこれは……このような辺鄙な村によくぞおいでくださいました」

どうぞ御上がり下され、と促され、客間に腰を下ろす。

だれひとりとして“現れない”住民。質素で古びた家々。何かしらの圧力をしているであろう村の長。

「ところで、貴方がたは何用で此処に？」

何の目的で此処に？ と問われて、祈響は背後の副リーダーにチラと視線を送る。

浅くため息をつき、零が口を開いた。

「……………政府の依頼だ。この村の『聖域』とやらに用がある」

聞いて、老人がおお、と目を見張る。

「……………やはり貴方がたがかの有名な……………ですが……………」

「……………？ 何か問題でも」

「……………あそこには近付かないほうがええ。あそこには……………もうひとりの神様がおる」

「……………神？」

低い声音で呟いたのは祈響。老人は深く頷いて続けた。

「暗き静寂の中で……………この村を、そして我らを……………ひっそりと見守っておられるのじゃ。故に『聖域』と名がついてしもつた……………」

もうひとりの、神。

その存在の佇む先は、深く閉ざされた静寂の間。

「あの女のせいだ」

今まで沈黙していた少年がふと口を挟んだ。祈響はチラと血色の眼で少年を見据え、口を開く。

「村長か？」

少年は頷く。

「全部、あいつのせいなんだ。きっと、神様を閉じ込めたのだった……」

今の村長がもうひとりの神様を閉じ込めたのだ、とコウタ。

「……なら、オレ達はその“神様”に逢いに行く」

長居は無用だ、と常に無い冷えた声音が告げる。  
銀糸を揺らし、立ち上がる祈響の前に、零はぞくりと肌が粟立つのを感じた。

青白い、炎。

血色の瞳に、チラ、とその色が見えた気がする。

ただ静かに、瞳の奥に秘めるそれは、一体。

「……行くぞ、零」

邪魔したな、と短く告げ、祈響は踵を返した。

「……正気か、祈響」

もうひとりの神と噂される輩に本当に逢いに行くのか、と問われ祈響はフ、と冷笑をこぼした。

「オレはいつでも正気だよ。だがそうだな……何も二人揃って出向くこともないか」

「……は？」

「……もともとオレの意見に賛成はしていなかっただろう？ だってらいつそのこと別行動をとったほうが効率が良い」

そうだろう？ と血色の瞳が笑う。

「……異論は無いようだな、零。じゃあここからは別行動だ。オレはもうひとりの神とやらに逢いに行く。お前は村長に謁見を願い出て話を聞く」

「…………初めからそうすれば良かっただろう」

無然とした零の言葉に、祈響は苦笑。

「まあ、そう言うな。……ほら、これやるから」

祈響はふと内ポケットに手を差し入れ、物体を取り出した。反射的に受け取ってしまった“それ”を見下ろし、零は怪訝そうな表情のまま。

「……何だこれは」



「応接室の茶菓子。味のほうは保証するぞ」

手のひらに収まる、色とりどりのそれ。糖類とみて間違いないだろう。

「それでも食べて、少しは頭が柔軟に働くようにするんだな、零」

薄く笑むリーダーに手のひらの物を半ば押し付け、「要るか」と零は至極冷淡に言った。

「せっかく恵んでやったのにつまらない奴。まあ良い……ついでにもうひとつプレゼント」

うつてかわって差し出された黒い物体。

「……………」

「自家製の通信機だ。尤も、オレが造ったんじゃないけどな」

「……“情報屋”か」

「」名答。弱酸性ならぬ弱磁気だそうだ」

「……理解しかねるな、あいつの趣味は」

「ははっ。まあ大丈夫だろ。あいつの造る物はいつも性能が良いから」

渡しておくよ、と祈響は告げ、踵を返す。

「じゃあな。幸運を祈るよ、優秀な副リーダーさん」

\*\*\*

「……?」

静寂に抱かれた道の途中。

零はふと足を止め、振り向いた。

「……風の音か……」

活気立つ気配を微塵も感じさせない村。当然の如く、人影どころか“人の気配”すら無い。

はあ、と浅いため息の後、零は思案する。

政府からの緊急要請。

現村長への謁見。

圧力をかけられた村。

もつひとりの神。

それらは、ちりばめられた“欠片”のよう。

だが。

だが、あの眼は。

あの血色の眼に、迷いは無いのであろう。

あの“神の眼”と畏れられる、血色の瞳には。

(…馬鹿馬鹿しい。何を考えているんだ、俺は)

思案ついでに余計なことまで考えてしまった。

第一、神などと言われる存在がふたつといたらそれこそ大問題になる。

『アイツ』ひとりでさえも、十分に迷惑しているというのに。

馬鹿馬鹿しい、と再度呟き、零は踵を返す。

刹那。

風の音が、一層強くなった。

その音は声のようだった。

その音は悲鳴のように。

響く。

“それ”に乗り煌めくのは鋭利な牙。

その姿は魔獣か、狼か。

零は深緑の瞳を僅か細め、おもむろに自身の得物を開く。

「『ケルベロス』」

その声に喚ばれ、現れしは漆黒の魔獣。

纏う覇気に僅か怯み退く屍達を見据え、低く、身構える。

「……やれ、ケルベロス」

“主”の命令でその牙が煌めき、標的へと。

だが。

「…!？」

消えた。

まるで陽炎のように。

まるで幻のように。

目前にいたはずの獣達が、消え失せる。

馬鹿な、と。

零が呟いた刹那、辺りに鈍い電子音が響いた。

「!？」

零は思わず身を強張らせる。

鈍い電子音は、自身の内ポケットかららしい。

《ジュシンチュウ ジュシンチュウ… ドーナサイマスカ ゴシユ  
シンサマ》

場にそぐわない音楽の後、聞こえてくるのはそんな文句である。

(…あの悪趣味情報屋が…)

零は内心舌打ちし内ポケットから“それ”を取り出す。

『…零、聞こえてるか?』

「微磁気らしい小型通信機からは、横暴リーダーの声音が聞こえた。

「…何だ、祈響」

『ふむ。聴こえは良いようだ。そっちはどうだ、零』

様子はどうだ、と訊かれ、零は口を開く。

「……………獣がいた」

『獣？ 魔獣か？』

「…いや、おそらく狼の類だろう」

おそらく狼であろうと告げると刹那相手が黙り込む。

『成程、狼ねえ…一応覚えておくよ、じゃあ引き続き頼むぞ』

それじゃあな、とこちらに有無を言わずに通信を切るリーダーに、零は深いため息をこぼした。

「……………」

まったく、何処まで我が道を行くのか。  
まあ今に始まったことでは無いのだけれど。

「…退け、ケルベロス」



獲物を失い、“主”の足下に待機していた魔獣にその声をかける。肯定するように短いうめき声を発し、魔獣は空気と同化するようにかき消えた。

零は静寂の中、ふと仰ぐ。

「……あの塔か」

深緑の瞳が見つめる先に有るのは、村で唯一背の高い塔。

古びた村の家々とは違って変わってそれは何処か冷たい空気を放っていた。

「…この村の村長とやらに謁見を申し出たい」

高く聳え立つ塔までたどり着き、零は淡々と言った。

「申し訳ありません、ただいま村長への謁見はご遠慮していただいております…」

受け付け役であろう人物が遠慮がちに声をかけてくる。

しかしネクタイに刻まれた“紋章”に、あ、と目を見張った。

「…ま、さか…」

察しがついたのであろう。好都合とばかりに零は口を開く。

「……『ローズロイヤル』副長、名は零と言っ」

『ローズロイヤル』の名を知らぬ屍は、今や居ないであろう。

血色の左瞳を携えし“指導者”<sup>リーダー</sup>が率いる先鋭組織。

その冷静且つ大胆な判断、そして何よりも屍達に畏怖を与えるのは、

その“背景”  
バックグラウンド

「……ど、どつぞお通りくださいっ」

途端に弱々しい口調になった受け付け役を深緑の瞳で一瞥し、零は先へと足を進める。

ほどなくして件の部屋であろう扉が見えた。

その扉に手を掛けようとして、けれど、零はその場に立ち止まる。

「……」

冷え冷えとした空気。それと同時に、独特の“匂い”が鼻を掠める。

血の、匂い。

「……まさか」

反射的に、扉を開ける。

その先には。

紅い。

冷え冷えとした静寂の中、黒く変色した紅き華は散らばっていた。

「……………」

目の前の“それ”は。

この村を治める者。

「……………」

充滿する独特の匂いに僅か眉をひそめ、零は足を踏み入れる。

屈み込みそつと指先で紅き華に触れた。

乾いている。

それも、完全に。

「……………」  
「こつなつたのは最近では無いと言つことが」

しかし、あの受け付け役もそしておそらく村の住人も　このこ  
とには気付いて居ないであろう。

あの。

横暴な“指導者”以外は。

「……………祈響。聞こえているんだろう」

『……………どうした、零。村長が何者かによって暗殺されていたか？』

何もかもを見透かしているかのように、通信の相手は言う。

解っていたのだ。

あの血色の瞳は。

あの銀髪青年は。

「……………何故言わなかった」

『“百聞は一見にしかず”と言っただろう？　だが……………やらずそれが裏目に出ってしまったらしい』

「裏目？」

『…ああ。あの爺さんも殺されてる』

「！」

通信機の奥から、コウタと言っただろうか、少年の泣き叫ぶ声が聞こえる。

『…オレとしたことが、手段を間違えた。完全に後手に回ったな』

とんだ誤算だった、と告げる声音は酷く、冷たい。

『零、一度合流するでしょう。場所は少年の家。出来るだけ早く頼むぞ』

言い終わるや否や切られる通信機を内ポケットにしまうと、零は踵を返した。

「……何だ、案外早かったな、零」

「……お前な」

合流するなりあからさまなからかいの文句を寄越すリーダーに、零はため息をついた。

家の中では未だ少年の泣き声が聞こえる。実際、零が引き返してくるまでの時間はそうかからなかった筈だ。

それを横目で見やり、祈響は薄く冷笑を浮かべる。

「……お互い、状況はお世辞にも良いとは言えないな。手掛かりがあつという間に消え失せた」

幸いにもひとつだけ残っているけど、と銀糸を揺らし、屈んでいた所から立ち上がる。

残る手掛かり。

『聖域』と謳われる場所に住むという、“もうひとりの神”。

「やはりその『聖域』とやらに行かなければいけないようだ」

「……どつどつ」

特定すらしていない場所にどうやって行くのだと問われ、祈響は僅か口元をほころばせる。

「…少しばかり手間がかかるが、“契約”を使う」

「契約？」

「ああ。オレの『ブラッディ・サイレンス』を使う」

そう言うや否や、青年は刹那契約の光を纏い、やがて彼を取り巻くように漆黒の鎖が具現する。

「と言うわけで。零、暫くの間一言も発すな。…ああ、勿論呼吸はしてても良いけど」

「何？」

「…少しばかり集中力を要するんでな。静かにしていて欲しいだけだよ」



別に深い意味は無いと祈響は苦笑して、浅く息を吐いた。

色の違う瞳が伏せられ、刹那。

静寂の空気がビリ、と震え始める。

本物だ、と零は思う。

圧倒的な“力”。

目に見える程のそれはただ“強い”だけでは表現出来ないであろう。

“少しばかり”なんてものじゃない。

もっとも、目の前の青年が化け物じみていることは今に始まったことでは無いけれど。

不意に、青年の指先に絡められた鎖が僅か揺れた。

「 ……見つけた」

フ、と祈響は唇をつり上げる。

おそらく、契約である己の得物を通して探知をかけたのだろう。“力”、それもある程度強いものならば十分に可能だ。

伏せていた瞳を開け、けれど、刹那ふら、と体が傾いだ。

「祈響」

「心配無い。“力”を一気に使い過ぎただけだから」

村の全領域に探知をかけた、と祈響は他人事のようにさらりと言  
う。

「……………」

自業自得だ。そんな荒業使う奴が他にいるとは思えない。

「…？ 何か言いたそうだな、零」

「…別に。場所がわかったのならさっさと行くぞ、祈響」

「ああ、そうだな。いざとなったら頑張って前線で戦ってくれたまえ、優秀な副リーダーさん」

心外だ、と言わんばかりに深緑の瞳を細める零に祈響はくす、と薄い笑みを浮かべて歩み出した。

ACT・05 自由への渴望

それは、村の外れに存在した。

手入れのされた名残さえ無く、ただそこにあるだけの空間。

『聖域』

その目前で、祈響は足を止める。

「……狼」

「は？」

それまで無言だった青年の唐突な言葉に、零は思わず訊き返した。

ふと紅の目が見つめていたのは、石像。

かろうじてその存在を示すそれは、まるで忘却の果てに奉られた神のよう。

「……狼は本来『大神』と書くらしい。たとえこの地の狼が絶滅

したとしても『大神』は“神様”として眠ることは赦されない。  
……こうして、奉られる限り……」

憐れだな、と。

そう嘲笑する声音は冷たく、何処か自虐めいていて。

「…祈響」

「…ただの戯言だよ。気にするな」

色の違う瞳を細め、ふと空を仰ぎつついつもの調子で祈響は笑う。

「……今日は月が綺麗に見えるぞうだ。もしかしたら狼男に出逢える  
かもしれないな」

世界を包み込んでいた赤が闇に払拭され、色を変える。

「…下弦か」

祈響は夜空を仰いだまま呟いた。

細い銀糸が月明かりに照らされ、鈍く光を放っている。  
同じく照らされる紅の左目が、微笑。

「……なかなか美しいが月は自ら光を放っているわけでは無いんだっ  
たな。そう思うと酷く滑稽に見える」

そうは思わないか？ と祈響は背後の零に笑みかける。

「……興味が無いな」

冷やかに応じる零に「そうか」と告げ、祈響は止めていた足を  
再び進めた。

その、刹那。

月が闇に覆われた。否、影が遮ったのだ。

「……へえ」

それを紅き瞳で捉え、青年は口元を涼やかにつり上げる。

「まさかそつちから出迎えてくれるとは思わなかったよ。 …もうひとりの“神様”さん」

低い咆哮。相手を威嚇するように牙を剥き、金色の瞳で此方を見据えるのは。

この地に祀られる『大神』そのものだった。

「…満月でも無いのに狼男か…馬鹿馬鹿しい」

それまで祈響の背後に居た零がおもむろに『滅亡童話』を開く。

だが。

「待て、零」

良く通る美声が、制止した。

その僅かな隙を掻い潜るように、『大神』は瞬く間に闇と同化した。

零は舌打ちをすると己を引き止めた青年を深緑の眼で睨み付ける。

「……何のつもりだ、祈響」

何故止めた、と問われ、祈響は紅の目を僅か細めて応じる。

「お前の眼鏡もとうとう度が合わなくなったのか？ あの『大神』……いや、狼は神でも、ましてや違法の屍でも無い……ただの屍だ」

「……何だと」

「さしずめ“古代種”と言ったところか。それに、気にかかることもあってな」

「……………」

「あの狼……深手を負っていただろう」

「……それが何だ」

「……矛盾しているんだよ。仮にあいつが村長と爺さんを殺したとして、何故深手を負っている？ あれほどの“力”を持つ者が、あんな無様に深手を負うか？」



「……不意討ちか」

「そういうこと。やはりもつひとり、“参加者”がいるようだ」

「…参加者？」

怪訝そうな表情の零に祈響はふと笑みかける。

「ああ。村長と爺さんを殺し、狼に深手を負わせた…愚か者がな」

銀糸が揺れ、紅き瞳が禍々しい光を放つ。

「あの狼に直接話を聞いた上で…その参加者を引っ張り出してみようか」

「…あの狼相手に話を通じるとは思えない」

「それはやってみないとなんとも言えないよ。意外と会話が弾むかもしれないだろう？」

「……ならば何故さっき話そうとしなかった」

訝しむように深緑の瞳を細める零に、祈響はやれやれ、といったふつに肩をすくめる。

「……深手を負っている奴から無理矢理話を聞こうとするほど、オレは薄情者じゃないさ」

唇に薄い笑みを浮かべ、青年は続ける。

「まあ、あれくらいの外傷なら、直ぐに治るかもしれないけど」

地に落ちている血痕を見つめて、祈響は何処か冷めた声音で言う。

「……ま、何はともあれ、あの狼の住み処まで足を運ぶとしようか」

咆哮。

何処か遠くで聞こえるそれは、まるで哀願のようだ。

「また咆哮か…これで何回目だ、まったく」

眩く零に、祈響は笑う。

「願い事でもしてるんじゃないか？ 流れる筈もない星々に」

「……くだらない」

「…そうだな」

不規則ながらも途切れることはない紅き血痕は、未だ目前に続いている。

銀糸を揺らし、青年は口元に薄い笑みを浮かべた。

「…だが、そんな“くだらない”ことにすがり付かないとオレ達は“生きて”いけないんだろっさ。…闇夜に浮かぶ、月のように」

やがて赤は途切れ、道も止まった。

「此処がその、最奥。」

ヒタヒタと妙な空気がすり抜ける。

だがそれすらも気にしない様子で、祈響は血色の瞳を細めた。

「…零、村長の謁見に行く際に、狼の幻を見たと言っていたな」

「……それが何だ」

「今、そのことにようやく合点がいった」

あれはこの奥にいるであろう狼だ、と青年は告げた。

そして、続ける。

「…我を失う程の怒りと怯え…“神”として隔離され奉られ続ける  
悲しみ…そして狂う程の淋しさがあいまった結果、こいつを突き動  
かしたのは…“自由への渴望”…ただそれだけなんだよ」

“自由への渴望”

それは、縛られた己から抜け出すが故の。

「良く有るだろう？ 富、名声、名誉…この世界の住人は皆、何かしらの“きっかけ”を求める。それが、こいつの場合には自由だっただけのことだ」

「……その想いは今や残像を村に具現させる…そう言いたいのか」

「ご名答。流石は我が『ローズロイヤル』きつての“頭脳”だな」

「……勝手に言ってる」

祈響の足がふと止まる。

月光が射し込む、『聖域』の最奥。

其処に佇み、月を仰ぐ、『大神』。

それを血色の瞳で一瞥し、祈響は口を開いた。

「……願い事は済んだか？」

銀糸から覗く紅き瞳に、狼の金色の目がわずかにたじろいだ。

だが聖なる地を護る守護神のように牙を剥き、低く、身構える。

祈響は唇に薄い笑みを浮かべつつ、言った。

「……だが、星々に願い事をしてみたところで何も変わらないだろうな」

“願い事”なんて甘い虚言でしか無いのだから、と紅の眼が笑う。

「……お前、何をそんなに畏れている？ この“眼”か？ それとも“参加者”か？」

祈響が言い終わるや否や、鋭利な牙が月光に煌めく。

己に向かってくる“それ”を避けようとせせずに、祈響は微笑する。

受け止めたその腕からはぼたり、と赤が滴った。

「…ッ やれば出来るじゃないか。その“力”…遠慮無く己を傷付けた輩に使えば良い」

刹那。

金色の瞳が揺らぐ。

「こんなちっぽけな“檻”に閉じ込められて、神だなんだと白眼視される日々から…飛び出してくるといい」

牙が食い込む腕にも構わず、祈響は続ける。

「他者に流されるな。自分を変えようとする“呪い”に抗って、ただ破壊を望む心を自分の意志で飼い慣らせ」

暴れる自身の心を、飼い慣らせ、と。

紅の瞳がすべてを見透かすかのように、光る。

「…オレは屍の頂点を目指す。創られたこの世界を叩き壊してでも、理想郷へ辿り着いてみせる。自由が欲しいと願うなら オレと共に来い」

しびれをきらしたかのように得物をとる零を眼差しで制し、「さあどうする？」と狼に問い掛ける。

刹那躊躇うような表情を見せた後 『大神』は牙を退き、一歩下がった。

フ、と血色の左眼が微笑して、祈響は赤に染まる腕を下げる。

「見ろ、零。話を通じた」

やってみなければ分からなかっただろうか？ と皮肉げに笑う青年を見やり、零は冷ややかな口調で応じる。

「……化け物同士だからだろ」

「かもな」と銀糸を揺らし祈響は笑うと赤の目にふと冷たい色を携え、言う。

「いい加減出てきたらどうだ？」

零にではなく、狼にでもなく。

その問いは、背後の気配へ。



「……絶対に見つからないって、思ってたんだけどなあ」

大きな褐色の瞳。幼さが未だ残る容姿。  
名をコウタと言っただろうか。

「気になったから、おれもついて来ちゃった。すごいなあ、お兄さんたち」

駆け寄ってくる“少年”に祈響は冷笑を浮かべ、呟く。

「“気になった”ねえ……オレ達がいつこの狼に喰い殺されるのか……それが知りたくて『猫かぶり』をしてまでついて来た訳だ。ご苦労な事だな」

「え？」

少年が目を見張るのも束の間、漆黒の鎖が少年を捕らえる。

「なんで？ どうして……」

「其れはどう答えれば良いか判りかねるな。何故“少年”である自分を捕らえるのか、それとも何故自分がもうひとりの“参加者”だ

と気付いたのか……もしくはその、両方が」

さあ、どれだ？ とせせら笑う青年を暫し見つめ、けれど、少年は唐突に笑い出す。

狂ったように笑った後、発せられた声音は“少年”とはかけ離れていた。

「強いて言えば後者、かな。上出来だと思ったんだけどね。あの演出も、泣き真似も」

「上出来ではあったんだろうが完璧には程遠かったな。仮にも『大神』を身代わりに暗躍するなんてのは喻えようも無く愚かだよ」

クス、と嘲笑を浮かべる瞳は、酷く、冷たい。

「はは、ひどい言われ様。でもさ、誰にだってあると思うよ？ “欲望” ってやつがさ」

何かを欲し、其れが故に壊し、それでも手に入れようとする物。そういうの、あるでしょ？ と“それ”は笑む。

「食べても食べても満腹にならない。むしろ渴いてく……でもそれを潤す術を知らないから、また食べる……美味しくもなんとも無いのよね。あの女も、老頭ロートル児も、大した力も無いくせに存在してるから……魂魄を奪ってやった。根こそぎね」

「『猫かぶり』の次は貪欲な狼気取りか？ 生憎だがどんな芝居を打とうと“羊”<sup>エモ</sup>にはありつけないぞ」

「お芝居はお互い様でしょ。お兄さんだって自分達が『壊し屋』だつてこと隠してたよね」

「低脳な“ハイエナ”と違って脳ある鷹は爪<sup>きりふだ</sup>を隠すんだよ。相手を狩る直前までな」

「じゃあ、今がその時なんだ？ へえ、面白い」

微笑したかと思うと“それ”は鎖に捕縛されたままにも係わらず跳躍する。

だが祈響はそれを一瞥すると涼やかに唇を歪めた。

「ひとつ、教えてやろう。深手を負った奴から無理矢理話を聞こうとするほどオレは薄情者じゃないが…愚か者に同情するほどお人好しでも無いんだよ」

「へえ、だったらどうするの？ お兄さん。おれの手を封じたところで足も動かし獲物だって喰える。油断したんじゃない？」

「…油断、ねえ」

祈響は嘲笑う。

「死肉に群がるだけのハイエナが好き勝手ほざいてくれるなよ。…  
油断？ そんなものしてないさ。“予想通り”だ」

言って

銀色が、揺れる。

紅が鈍い光を放ち、より禍々しい。

「さあ 思い知るといい。『壊し屋』を見くびった報いを、そして、『大神』を侮辱した己の愚かさを…永久の牢獄の中で悔やむんだな」

冷えた声音で告げられる、“終焉”。

紅の華。

“刻”が消える。

紅。

禍々しく、それでいて酷く相手を魅了する。

「……はっ……なんだ……お兄、さん……“本物”だったんだ……あーあ……ツイてないや……」

受け身をとることすら叶わず、地に着いた“少年”を冷ややかに見下し、祈響は嘲笑する。

「……“本物”なんかじゃ無いさ。ただの模造品だよ」

不規則に呼吸を繰り返す相手の耳元で、そう呟く。

「……そっ、か」

それきり、黙り込む。

踵を返した青年を、呻きながら仰ぎ見る事しか出来ない“少年”は、けれど“最期”の一矢で。

青年の首筋に噛み付いた。

筈だった。

「…………馬鹿が」

鈍い銃声。

次いで、冷やかな声音。鈍色の銃を構え、零が眩く。

青年にすがり付くような姿勢の後、頭上から細い煙を携えて、  
“少年”は力無く地に墮ちた。

それを、酷く冷たい瞳で見やると、祈響はそのままの姿勢で、

「珍しいな、零。お前、銃は滅多に使わないだろう？」

「一応支給はしてあるけど、と祈響は笑う。

「……………そういう日もある」

「なら今日は吉日だな。新入団員も増えた事だし」

「…………お前、まさか」

二、と不敵な笑みを唇に浮かべ、祈響は狼の元へ屈み込んだ。

「悲劇はもう終いだ。主役も舞台から降りるのが自然……………だろ？」

手を差し伸べ、“指導者”は微笑する。

一緒に来ないか？ と金色の眼に、問い掛ける。

狼は。

金色の瞳を僅かほころばせ。

頷いた。

それを確認すると祈響は銀糸を揺らして立ち上がる。

「さて、戻ろつか。由良が待ってる」

踵を返して歩み出し、「ああ、そうだ」と青年は振り返り微笑する。

「零、向こうに帰ったらコーヒー淹れてくれ。勿論ブラックで」



ACT・06 神の不在

「……」

「……零、何やってる。オレのコーヒーをただの茶色い液体にするつもりか」

「……祈響」

「ん？」

「……何故こいつが此処にいる」

無然とした面持ちのまま、零は眼鏡を押し上げる。その視線はかつて『大神』と呼ばれた者に向けられていた。

対して、愛用のソファに足を組んで座る青年は優雅に微笑んだ。

「お前の老化現象も堪ったもんじゃないな。偉大なる元『大神』の存在を忘れるとは」

「……それを訊いているんじゃない。俺が訊きたいのは、何故こいつが此処にいる必要があるのかと言うことだ」

「ああ……今のこいつには躰が必要だからな。暫くは此処に置くことにした」

その刹那、零の眉がぴくりと不快感に動いた。それを見落とさなかったのか、祈響はくす、と笑う。

「……もしかして、動物苦手か？」

意外な弱点新発見、とあからさまにからかいと見える文句を吐く青年に「そんなわけあるか」と零が冷ややかに応じたと同時に。

遠慮がちに、事務室の扉がノックされた。

「開いてる」

祈響が短く応じ、奥から藍色が覗く。

「お帰りなさい」

「ん。悪かったな、留守番任せて」

お疲れ様、と祈響が笑むと、由良はぎこちなく微笑んだ。

不意に藍色の瞳と金色の瞳の視線が交わって、

「この子は？」

「ああ、こいつか。先日の依頼で意気投合してな。なかなか利口な屍だ」

零は苦手みただけどな、と祈響は笑う。

「…で？ そいつ、名前は」

淹れ直したコーヒー、紅茶、そして今入ってきた少女の為にトットミルクをそれぞれ机に置き、零は言う。  
どことなく不機嫌な様子で。

「そうだな…“ライカンスロープ”。略して“ライカ”」

即興だが良い名前だろ？ と祈響は笑う。

「“人獣”か…安易だな」

「シンプル・イズ・ザ・ベストと言うだろ？」

言葉を詰まらせる副長にくす、と祈響が笑った直後。

不意に、“来客”を告げる鐘が響いた。

紅い瞳を僅か細め、コーヒーを飲み干すと、青年は立ち上がる。

銀糸を揺らし、冷えた声音で呟く。

「…政府の輩か。この時期に来るとは…驚きだ」

カップを置き、“紋章”の入ったネクタイを締めて祈響は銀糸を揺らした。

「おそらく今回の緊急要請の件だろうな。政府の小言を聞くのも面倒だが…オレひとりで出迎えて来るよ」

「 久しいですね、祈響殿」

祈響殿、と。

す、と背筋を正し、近付き難い空気を纏わせそう呼ぶのは、政府

の“氷の華”と謳われる女性。

「誰が来るのかと思っただら…：よりによってアンタか、銀嶺<sup>ぎんれい</sup>」

応接室のソファにもたれ、祈響はあからさまな文句で出迎える。

「その軽率な物言いで足元を掬われると何度も申しておりますよ」

氷のような眼光をチラと青年へ向け、冷やかに銀嶺が告げると、  
ク、と短く笑って祈響は「それはどうも」と肩をすくめた。

「何の用だ？ 用も無いのにわざわざ支配下の組織を訪れる暇は無  
いと聞いたが」

用件は、と問われ、銀嶺は表情ひとつ乱さず応じる。

「またひとり、違法の屍を引き入れたそうですね、祈響殿」

「政府の断りも無しに”：か？ 始めに断った筈だ。好きにやら  
せてもらうとな。それに、あいつは違法でも何でも無い。政府の目<sup>おまえら</sup>  
も、そろそろ狂ったんじゃないか？」

嘲笑を浮かべる青年を一瞥すると銀嶺は変わらず冷淡な口調で、

「その言動、その体裁…：とても組織の“指導者”とは思えませんね」

「褒め言葉をどうも。こういう男なんでね」

個性は大切だぞ、と笑う青年を見やり、

「“お遊び”はほどほどにした方が賢明です。そのようなことは当  
にご存知でしょう?」

「ああ、聞いた。だがオレは遊びだと思ったことは一度も無いんだ  
よ。ましてや、『はい、そうですか』と同胞を差し出そうと思った  
こともない。政府がどう言おうと…この組織の“指導者”はオレだ」

そう告げる声音は、瞳は、確固たる意志を携え。

青年の美貌からは笑みが消え、赤の眼が、より禍々しく染まる。

「オレ達はオレ達のやり方で“理想郷”までたどり着く。必ずな」

手出しはするな、とその声音は告げる。

「このオレを説き伏せようと思うなら…トップである“奴”を連れ  
てくるんだな。考えてやらないことも無い」

不敵な笑みを浮かべる青年の言葉に、銀嶺は淡々と告げた。

「この事は“上”に報告します。もう少しご自分の立場と言  
うものを考えた方が宜しいかと」

「へえ。それは“忠告”か？ それとも“警告”か？」

「自由」

好きなように解釈すればいい、と。

言って、銀嶺はス、と無駄のない動きで立ち上がり、踵を返す。

「…ああ、そうだ」

歩み出した相手を、青年がさも今思い出したかのような口調で呼  
び止める。

「“上”に報告するついでに、“奴”に伝えてくれないか」

「……何です」

「……その《羽》、直ぐに墮としてやるよ”……ってな」

聞いて、銀嶺は振り返る事無く応じる。

「……世迷言を。あの方は貴方とは違います。悠々と空を舞い、やがては狩人に撃ち殺される鷹のように不様に墮ちるようなことなど、有り得ませんよ」

「そうか。それは失敬」

肩をすくめ苦笑する“指導者”を刹那一瞥し、銀嶺は足音を立てず扉の奥へ消えた。

閉められた扉を赤の眼で暫し見つめ、祈響は嗤う。  
紡ぐ声音は掠れ、酷く冷たい。

「その《羽》を赤で染める時は、そう遠くないというのに……」

一方。

「離れる狼男ッ。噛み付くなッ」

『ローズロイヤル』事務室では、ひとりの男と少年が取っ組み合



っていた。

不意にその扉が開き、

「あ、祈響」

それに気付いた少女が紙面にペンを走らせる。

「何だかんだで結構仲良いじゃないか、零」

「…………お前な」

これらの何処がそう形容出来るんだ、と睨む零に祈響は笑い、ソファに座る。

「ライカ、零にじゃれつくのも程々にしてやれ。そうしないとこいつがストレスで過労死する」

それは困るから、と祈響が微笑すると、ライカは大人しく由良の傍らに座った。

「…………睨む前に感謝して欲しいんだけど、零。ああ違うか…………動物

嫌いな副長さん」

「……いちいち言い直すな」

この横暴リーダーが、と零はため息交じりに言った。

机上に散らばる本来の意味をなさなくなった書類達を見つめ、零は短く舌打ちした。

「……余計な仕事増やしやがって……」

大体掃除するのは誰だと思っているんだ、とこぼすと青年が微笑。

「まあ良いじゃないか。好奇心旺盛なのは悪い事じゃない」

「それとこれとは話が別だろう」

「同じさ。興味が有ることには貪欲にならないと、この世界に残れないどころか理想郷の足元にも及ばない」

そうだろう？ と祈響は笑んだ後、組んでいた足を解き、ライカに声をかける。

「ライカ、丁度良い機会だ。この“世界”を視せてやるよ」

わずかに首を傾げるライカを祈響はついてこい、と促した。

\*

音を立て、扉が閉じられたと同時に、零は深いため息をつく。彼を仰いだ由良が、スケッチブックにペンを走らせた。

「零、少し休んだら？ 最近依頼続きで疲れてるでしょ？」

副長の仕事は極めて多い。

いくら『ローズロイヤル』が少数の先鋭部隊と言っても、依頼が少ない訳ではないのだった。

だから、休める時に休んだ方が良く、と。由良が紡ごうとした刹那。

規則正しい寝息が、ソファから聞こえてくる。

黒髪に隠された深緑の瞳は、おそらく閉じられていることだろう。

あの指導者は、気づいていたのだろうか。

そんな事をふと思いながら、由良は空いているソファに座る。

空は蒼く、透ける。

暖かな静寂に、由良はふと笑みをこぼした。

\*

思いの外、呆気なく沈んだ意識を浮上させ、零は僅かに深緑の瞳を開いた。

眼鏡越しに映る銀色。それと同時に油性ペン独特の匂いが近付いてくる。

油性ペン…？

「ッ…！」

思わず身を退く。

「ああ、おはよう」

「一」と微笑する青年を目前に、零は問う。

「…何をしようとしていた」

「落書き」

悪びれず即答する相手の胸ぐらを掴み、

「……」一発殴らせる

「却下」

仕方がない、と言った風に、祈響はペンのキャップを閉め、つまらない、とぼやいた。

愛用のソファに背を預ける青年に、零は訊いた。

「…由良とあの狼男は」

「ああ、自室。時間帯で言うと夜だからな、今」

器用に油性ペンを指で弄びながら、祈響は言う。

どのくらい眠っていたのだろう、と思うところで、祈響が続けた。

「どうだ、零。良く眠れたか？」

随分と疲れているようだったが、と心情を見透かすように、赤の眼が笑う。

「……どういっつもりだ」

「別に？ お疲れ気味の副長さんにサプライズプレゼント」

なんてな、と笑う祈響に、零は呆れたようにため息をつく。

「…馬鹿だろ、お前」

「束の間の休息ってやつだよ。今日は“神様”が不在の様だから」

「…『アイツ』に不在も何も無いだろう」

「まあ、そうだけど」

ははっ、と無邪気に笑う青年はソファから立ち上がり、棚から盤を取り出した。

次いで、同じ棚から黒と白の硝子で形どられた駒が同じく取り出される。

「久しぶりにチェスでもやらないか？」

眠気覚ましにどうだ？ と青年が微笑するのに、零は「仕方がない」と応じる。

「1ゲームだけなら、付き合ってやる」

夜の帳が降りて、暫くの時が過ぎた。

「　　なあ、零」

歩兵<sup>ポーン</sup>を片手に、祈響は呟くように問う。

「チェスには白と黒しか無い。戦争には、勝か負しか無い。……それが当然で、必然だ。でも、だったら、そのどちらにも“入れぬ”モノは……“異端”以外の、何なんだろうな」

どちらにも染まらず、どちらにも属さないモノが在るとするなら、それは異端以外の何なのだろう、と。

そう紡ぐ声音は淡々としていて、けれど酷く自虐めいていた。

「……別に、世界が白と黒で出来ている訳では無いだろう。戦争にしても、必ず勝敗がつくとは限らない。和解することだって有り得る。……“異端”でも、何でも無いだろ」

応じるように、零は言う。

祈響は駒を動かしながら、

「そっか」と微笑した。

「お前らしい回答だな」



“いつもの”調子で笑う青年は手に持った“騎士<sup>ナイト</sup>”を盤に置き、続ける。

「……確かあの時もお前はそんな風にオレに説教したんだった」

「……根に持つな。だいたい、昔の話だろう」

「……そうだな」

両者が暫し沈黙し再び静寂の中。

カツン、と硝子同士がぶつかる音。

白と黒が入れ替わる。

そして。

“王<sup>キング</sup>”が終焉を迎えた。

「  
チェックメイト」

青年が唇に笑みを浮かべる。

「…これで、通算50連勝だ」

つまりお前は通算50連敗だな、と青年は獲った“王”<sup>キング</sup>の駒を手のひらで弄び、言う。

「やはり柔軟性に欠ける。物事を堅苦しく考え過ぎだぞ」

「うるさい」

くす、と笑う青年を前に零は内心舌打ちした。

「まあ、そういう奴も居ないとからかい甲斐が無いんだけどな」

「……お前な」

どうして当人を前にこいつは平気でこいつ台詞が言えるのか。

“昔”の方がまだほんの少々は素直で聞き分けが良かった気がする、と思うところで、赤の眼と視線がぶつかる。

「？何か言いたそうだな。零」

「…別に」

そう応じ、零はふと窓の外へ視線をやる。

「…明けたな」

「ああ」

本当だ、と祈響は笑む。朝陽を浴び、銀色の髪が、煌めきを放つ。

「さて、次はどんな奇怪な依頼が舞い込んで来るのやら」

言って、赤の瞳が心底愉しそうに、笑った。

ACT・07 まどろむ夜空たち

「……何やってんだ、お前」

「ん？ クロスワード。暇潰しに」

『ローズロイヤル』事務室では珍しく“指導者”<sup>リーダー</sup>である青年がペンを片手にソファへ座っていた。

「…暇なら少しは手伝え」

「それはオレの仕事じゃない」

にこりと微笑み即答する青年に、零はため息をつく。

こいつには何を言っても無駄なのだ。何処までも我が道を行く指導者なのだから。

それで納得出来る自分に腹が立つが。

不意に、ペンの落ちる音。

反射的に零が音のした方を見やると、祈響が銀糸から覗く赤の眼を押しさえ僅か顔をしかめていた。

「……どうした」

「…いや、何でもない。少し寝不足なもんでな」

ここ数日ろくに寝てないんだ、と笑う祈響は床からペンを拾い上げるとソファから立ち上がる。

「シャワー浴びてくる」

それだけを副長に告げると銀糸を揺らし、祈響は扉を閉めた。

その音を背後に、ペンを走らせたまま零が呟く。

「……………馬鹿が」

\*

規則正しくノックされる音に、零は書類にペンを走らせたまま短く応じる。

扉が開き、相手の姿を確認すると、一旦手を止めた。

「…由良か」

「書類、持ってきたんだけど。入って大丈夫？」

「ああ」

少女の華奢な腕に抱えられていた書類を受け取り、零はペンを置く。

「…何か飲むか？ 由良」

由良は僅か頷いた。

「ホットミルクがいいな」

「分かった」

零が応じると同時に事務室の扉が再び開かれ、その奥から銀色がふわりと揺れた。

「……ああ、来てたのか。由良」

銀糸を無造作にかきあげ、赤の眼に薄く笑みを浮かべると、青年は愛用のソファに座る。

彼を仰ぎ、由良が不安げに紙面に言葉を紡いだ。

「祈響。顔色、悪い」

「それは元からだろ？」

死体から“生まれた”屍なんだから、と笑う青年に、そうじゃない、と由良は首を振った。  
俯く少女を見やると、祈響はその髪を優しく撫で、

「…大丈夫だ。何も、心配することはない」

大丈夫だから、と笑んで、青年は傍らの副長に同じく笑んだ。

「零、オレにもコーヒー」

程無くして、湯気を伴う飲み物が三つ、机上に置かれた。

コーヒーを口に運んだ祈響がふと思い出したように零を仰ぐ。

「…腹が減ったな。コーヒーついでに何か食いたい。パスタ的な」

「……オレに作れと」

「なんだ、分かってるじゃないか。そうだな、和風が良い」

頼んだ、とそう言つや否や、“来客”を告げる鐘が響く。

「……どうやら、昼食はお預けのようだ」

やれやれ、と祈響は肩をすくめ、ソファから立ち上がる。

「政府といい客人といい……最近の奴等はせっかちな。少しは気楽に構えれば良いものを」

青年は踵を返すと、零を背後に応接室へと向かった。

応接室。



その扉が開く音に、弾かれるように顔を上げる“依頼人”である女性。

彼女にフ、と笑みかけ、青年は言う。

「ようこそ我が『ローズロイヤル』へ。零、紅茶」

そう傍らの副長に告げると、自身は依頼人と相向かいのソファに座り、優雅に足を組んだ。

程無くして依頼人の前に紅茶が置かれ、それを確認すると、青年が口火を切る。

「さて、客人。入団希望」と言う訳では無いんだろう？ オレ達に依頼があると聞いているが」

相違ないか、と問われて、依頼人は僅か俯く。

そのままかき消えてしまいそんな声音で、呟くように彼女は言った。

「あの、取り合って頂けないのは分かって」

「ああ、無駄な前置きは結構だ。取り合うか否かは此方が決める事だから」

唇に薄く笑みを浮かべ、言葉を遮る“指導者”。

彼をチラと見つめるように依頼人は僅か顔を上げ、再び唇を開いた。

「朝が、来ないんです」

「……朝が来ない？」

珍しく怪訝そうな青年の問いに、「はい」と依頼人は頷く。

「……対処法としては一度眼科に行くことをおすすめするが」

「違うんですッ。私個人では無く…街全体に、朝が来ないんです」

政府に懇願したところで錯覚だと門前払いをされる。だからこの組織に頼むのだ、と依頼人は言う。

「……それで、オレ達に何をして欲しいと？」

「救って頂きたいんです。私達の街を。そして、消えた子供達を」

「子供達？」

依頼人はまたも頷く。

「朝が来なくなった途端、街の子供達がひとり、またひとりと消えて行くようになったんです。消息も分からず、もちろん、帰ってきた子供も居ません。まるで……」

まるで、と依頼人は続ける。

「……まるで、ハーメルンの笛吹きに連れ去られてしまったかのようだ」

“朝の来ない街”に“消えた子供達”。そして“ハーメルンの笛吹き”。

それらの怪奇現象から自分たちの街を救って欲しい、と、依頼人は告げた。

「用件は分かった。だが……生憎“人助け”は趣味じゃ無いんだ」

「……やっぱり、そうですね。こんな奇妙な現象、誰も相手にしてくれない」

俯き、弱々しい口調で言葉を紡ぐ依頼人に、祈響はちよっと待ってくれ、と告げる。

「何か勘違いしている様だが、オレは人助けをしないと云っただけで何も依頼を拒否した訳じゃない」

「ッそれじゃあ…」

顔を上げる依頼人に、祈響は二、と笑む。

「良いだろう。その依頼、受けて立とうじゃないか」

「さて、善は急げと言っからな。零、由良とライカを呼んで来い」

「…何故あの狼男まで呼ぶ必要がある」

「良いじゃないか。仕事に早く馴染んでもらうには“習うより慣れる”だろう？」

違うのか？、と問われて、零は短く舌打ちをすると事務室へと引き返して行く。

その様子を見届けながら、祈響は柵から地図を手に取り、広げる。

「客人、アンタの街の名は？」

「…私達の街に…名はありません。もともと、昔はあった様ですが…」

銀糸をかきあげ、そうか、と祈響は微笑する。

「成程な…オレも少し出掛けてくるか」

「え？」

「ああ、アンタはそのままここで茶でも飲んでいてくれて構わない。そう経たないうちにウチの副長が戻ってくると思うから」

「え、あ、あの…っ」

突拍子のない“指導者”の言葉に、依頼人がどうということだ、と聞く間もなく、青年は地図を柵に戻し、さっさと踵を返して応接室から姿を消す。

「……………」

皮膚にも程よい温度になった紅茶を口に運び、依頼人はどうしたもののかしら、と小さくため息をついた。

程無くして、応接室の扉が再び開かれた。

けたたましい物音を携えて、だが。

「ツまとわりつくな狼男ツ。おい祈響ツ」

室内に居るで有ろう人物に零がその声を掛けるも、そこに居たのは依頼人のみ。

「……………」

「…ええと、どこかに少し出掛けてくると仰って先程出て行きましたけど」

「……あの馬鹿」

依頼人ほったらかして何をしているんだ、あの横暴リーダーは。

それ以前に依頼人に伝言を頼むな。

「…あの、すみません。私何か変なこと言いましたか？」

「……いや、あなたのせいじゃない。いつもの事だ」

言つて、零は深くため息をついた。

\*

ギイ、と重い音が響き、良く通る美声が次いで響く。

「居るか、スミ枢」

祈響は暗闇にその声を掛けた。

程無くして別の声音がくすり、と笑んだよう。

「おんやア。久し振りだねエ、君と逢うのも」

コツ、と靴音が響き、徐々に浮き出てくる赤紫色の長髪。その双眸は帯のような拘束具で覆われている。

その傍らには黒猫。

「やア、いらっしやい。“神様のお気に入り”君」

祈響はフ、と微笑して相手に告げた。

「その呼び名はよしてくれないか。あまり好きじゃない」

「おやア、それは失敬」

対して、男 枢は唇に笑みを浮かべ、言う。

刹那、その指先からキラ、と光る金貨が弾かれた。

ゆっくりと旋回し枢の手の甲に収まった金貨は手のひらに覆われ、煌めきを隠す。

「 Which? 」

「 ……表 」

相手の問いに、青年は当然と言わんばかりの口調で応じる。



ゆつくりとした動作で覆っていた手のひらが退けられ、金貨が姿を現す。

枢は軽く息を吐いて、おもむろに椅子の背もたれに重心を傾けた。

「当たり前ー。相変わらず良い勘しているねエ。某もビックリさ」

「そういうお前も相変わらずの“ゲーム好き”だな、枢」

相変わらずだな、と互いに微笑して、枢が続ける。

「暇を持て余している某にこうした“ゲーム”は必要不可欠なのさ」

普通に話を聞くのもつまらないだろう？ と笑う枢に「それは同感」と祈響は苦笑気味に応じた。

ふと足元にすりよってくる黒猫を抱き上げると、

「…悪いな。今日は零は居ないんだ。これから依頼だから」

青年はそう黒猫に告げると床につかせる。それを“見る”と枢は笑って言った。

「それじゃあ、話を聞こうか。祈響くん」

「ふむふむ。朝の来ない街にハーメルンの笛吹きねエ…実に良い組み合わせだ」

闇に乗じて音色を奏でる。実に素敵で興味深いね、と。

身軽に机上に身を乗せる黒猫を懐に抱き、枢は笑う。

「おまけにその街には名前が無い、と。恐らく政府の影響だろうねエ」

依頼状ではなく直接依頼人が来たことが良い証拠だ、と枢。

「とまア、それくらいは君も分かりきっているだろうけどねエ。しかし資料は当然の如くゼロ。だから某の処に来たんだろう？ 君は」

まあな、と微笑して祈響は応じ、続けた。

「この世界でお前に知らない事は無いんだろ？ 門番兼情報屋」

聞いて、枢は「ああ」と笑う。

「“門番”ねエ…久し振りにその名前を聞いたなア。もっとも、某はもう退職している身だけどねエ」

“門番”

この世界に“呼ばれた”者達を最初に出迎える云わば“道標”。

とつくのとうに若手にバトンタッチさ、と口元をほころばせる“情報屋”に「ああ、そうだっけ」と祈響は言う。

「…長い間この世界に居ると忘れることも多くな」

「そうだねエ。少しばかり“長生き”し過ぎているかもしれないねエ。某も、君も」

「…かもな」

苦笑する青年に、枢は背後の棚から一冊の書物を取り、差し出した。

「これは？」

「その街の資料さア。お望みのモノとは、限らないけどねエ」

歴史といい、時間といい、流れるモノは残酷だからねエ、とのんびりとした口調で枢は口元を歪ませる。

「そうだな」と相槌を打ちつつ、祈響は受け取った資料を開いた。

其れは名も無き小さな街。

けれど、“太陽”を何よりも尊び、“神”とまで敬う住人も居た程の活気づいた街である

「……神、か……」

紅の眼をす、と細め、どこか冷えた声音で祈響は呟く。

しかし、刹那微笑をこぼすと資料を閉じた。

「じゃあ、オレはそろそろ戻るとするよ」

零に説教されるのも退屈だしな、と薄く笑み、青年は立ち上がる。

「もう良いのかイ？」

そう笑う情報屋にフ、と笑んで踵を返し、けれど、刹那立ち止まる。

「あゝ、そう言えば、この前の通信機の試作品。なかなか使えたよ」

また今度正式に使いを送るよ、と告げる青年にそれは良かった、と枢は応じる。

「またいつでもおいで “神様” に似て非なる“君”」

\*

「遅い」

応接室の扉を開けるなり、副長の冷やややかな声音。それに苦笑気味に応じ、祈響は言った。

「それは悪かったな、零。向こうで茶でも飲んで来れば良かったか？」

皮肉にそう笑む“指導者”はふと左右異色の瞳を“依頼人”へ向ける。

「必要最小限の情報は得た。そろそろ行くところか」

\*

「こちらです」

依頼人は慣れた手つきで門を開け、祈響達を促した。

朝の来ない街。

それは名の通り、夜の闇に抱かれている。

「随分と厳かだな。壁で隔離されているのか」

街全体を囲むように高く聳え立つ壁に僅か触れ、祈響は問う。  
ええ、と依頼人は応じた。

「壊そうとは思わないのか？」

「思わない……と言ってしまえば嘘になります。しかしこの壁は強力な“磁気”によって作られているんですよ」

壊そうとすれば、“猛毒”が街中に広まってしまいますから、と依頼人は苦笑した。そしてそのまま続ける。

「もつとも、外の世界に“猛毒”なんて無いのは分かっているんですけどね。街のみんなは昔から外の世界は信じて居ないらしくて」

「……そうか」

あんたも大変だな、と祈響は微笑する。

「だから街全体を囲むように壁を作った……か。迷信深いな」

零がポツ、と呟き、眼鏡を押し上げた。

「でも私達はそれを信じるしか無いんです。例え……政府に隠された街に住んでいるとしても」

「……知っていたのか」

「ええ。祖母に幼い頃から教えられてきましたから。……この街に名は無い。政府がいつからかそれを抹消した。有るのはこの蒼空に輝く《太陽》<sup>カミサマ</sup>だけだ”…と」

祈響の問いに苦笑して応じる依頼人がすみません、と告げる。

「お客様をこんな所で立ち話に付き合わせてしまって……ご案内しますね」

対して、『ローズロイヤル』指導者は僅か微笑する。

「ああ、頼む」

両脇に構える店々。照明に照らされ、品々が鈍く煌めいていた。それらを通り過ぎたところで、依頼人がふとこぼした。

「皮肉、ですよね」



足は止めず、続ける。

「元々太陽を神様と敬い、畏れてきた街に…太陽が来ないなんて」

「……」

「朝が来ないと言うことは、夜が“眠れない”こと。あり得ない事だから…そこには矛盾が生まれる」

「矛盾……か」

青年がそう低く呟いたと同時に、何処からともなくこちらを揶揄する声音が聞こえてきた。

「見て、あの紅い目。まるで獣の様だわ」

「やだ、気味悪い。あの銀の髪もよ」

「ちょっと、聞こえるわよ。あの方は……」

気が悪いと口々に囁き合うのは街の女達である。それらの言葉はすべて、青年に向けられていた。

「…あ、の」

依頼人が口を開くや否や、青年が微笑する。

「陰口めいた言葉には慣れてるから」

内部の世界しか知らない住人にこの姿はさぞかし異形と映るのだから、と祈響はやや自虐的な笑みを浮かべる。

「それはそうと、ひとつアンタに訊きたいんだが」

「なんででしょうか」

「この街は隔離されている様だが…外部の情報が知らされない訳では無いのか？」

「少しは入ってくるようになっていきますね。時々、数人が外部へ出掛けることも有るんです」

「アンタのようにか？」

問うと、依頼人が苦笑する。

「私は…少し違つかも知れませんが。私は」

私は、と。

刹那、足を止めると依頼人は微笑。

「その資格なんて持って無いんです。だから、有り得ない」

矛盾なんですよ、と依頼人はそう告げた。

「ああ…それも違うかも知れませんが、矛盾ではなく、“歪み”なのかも」

聞いて、祈響は微笑する。

「それなら、オレ達は皆“歪み”によって“生まれた”と言っべきだろうさ。でも、そうだな…」

祈響は何処か遠くを見つめるように夜空を仰ぐ。

「《有り得ないこと》と《矛盾》が必ずしも結ばれるとは限らないが……“歪み”は誤魔化しようが無い。それを正当化しようとしたところで所詮無理な話だ」

“歪み”は“歪み”でしかないのだから、と。

紅の眼が、自嘲めいた笑みを、浮かべた。

\*

「小さな家ですが、どうぞお寛ぎください。今、お茶を入れますので」

そう言つて、奥へ消える依頼人の後ろ姿を左右異色の瞳で見送り、祈響は椅子に座る。

「あの、紅茶で良かったでしょうか」

「ああ、構わない」

ありがたく頂くよ、と其れを受け取り祈響が笑む。

それとは対照的に、依頼人が暫しの沈黙を伴い、頭を下げた。

「……先程はすみませんでした。皆、外の世界に疎いもので」

「別にアンタのせいじゃない。謝られる理由も義理も無いさ」

それにしても、と祈響は続ける。

「この街は他人の為に頭を容易に下げる習慣でも有るのか？」

「……少なくとも『他人』では有りません。この街の住人は皆、」

家族』です」

青年の手元にある空のカップに気付き、依頼人が立ち上がるうとするのを「もう結構」と断り、祈響は足を組んだ。

「『家族』…ねえ…」

「ええ。お互い助け合っていかなければ…私たちはとてもじゃ有りませんが暮らしていけません」

言って、依頼人は微笑む。

「今日はお疲れでしょうからお休みください。大したおもてなしは出来ませんが…上の空き部屋は自由に使って頂いて構いません」

どうぞ、と促されて、祈響達は階段を登った。

\*

「都合が良すぎると思わないか？」

煌々と輝く月を仰ぎ、青年が男に問う。

“朝の来ない街”  
外部との隔離をはかり、内部の者を皆『家族』と称する街。  
『内部』に異常な程の執着を持つその街に『外部』の者が容易く入  
れるものだろうか、と。

「……何が言いたい」

「スムーズに進み過ぎてるのさ。この展開も、事態も」

「仕組まれている…とでも？」

かもな、と祈響は苦笑。

「それにこの街の壁」

視線を月から外し、青年は続ける。

「強力な磁気によって造られたと言っていたが…あれは嘘だ」

「……嘘？」

「そう、嘘。その代わりに妙なモノが溢れてたけどな」

お陰で少々気分が悪いよ、と祈響は笑った。

「まあ、今言えることはひとつ」

銀糸が揺れ、紅の眼が煌めく。

「今回の依頼人は…何かを隠してる」

「……言いたくないことのひとつやふたつ有るだろう」

「その事は否定しないが…その『言いたくない』事が他にもないこの街の『真実』だったら？」

「……隠蔽か」

おそろく、と祈響は首肯する。

「しかし、それがこの街の怪奇現象に関係するとなると『言いたくない』で済まされる問題じゃ無い」

紅の眼が冷たく光を放つ。  
けれどそれは一瞬で、直ぐにその口元には笑みが浮かんだ。

「ま、夜はまだまだ長いからな。気長に相手を待つとしようか」

\*

時を同じくして、一方。

『ローズロイヤル』指導者とその副長が控える部屋の隣室である。

「ライカ？」

ぴくり、と何やら反応を示した少年に、少女は問い掛ける。

「どっかしたの？」

すると、ふと金色の瞳が窓を仰いで、

その唇が、静かに開いた。

「……声」



「え？」

「…違う…音…」

仮にも獣として生活してきたライカにとっては、常人では聞き取れないで有ろう遠くの音も聞こえるのだろう。

そういえば、祈響が「ライカに言葉を教えてみた」と笑っていたっけ、と由良はふと思った。

近付いてくる『音』。

それは少女の耳にも届く程に、大きくなってきていた。

音。

人の声でも、獣の声でも無い。  
かといって、物がぶつかり合う音でも無い。

これは。

笛の、音だ。

そう認識した後、直ぐ脳裏に浮かぶのはこの街で夜毎子供達をさらうと言う件の人物。

ハーメルンの笛吹きそのものではないか、と由良は隣室の扉を叩いた。

程無くして開けられた室内に既に指導者の姿は無く。

「祈響は？」

由良が室内に残っていた零に問うと、彼は深いため息をついた。その意味が掴み切れず、僅か首を傾げると、零は言う。

「“例の奴”に会いに行った。そこの窓から飛び下りてな」

\*

“朝の来ない街”。

静寂に包まれていたそれは、場にそぐわない軽やかな音色に彩られている。

足音。

笛の音色。

足音。

ひとつふたつ、と。

交互に聞こえるそれに、指導者の青年は銀糸を揺らし、笑う。

「 ……頃合いだな」

指に絡めた自身の得物を弄びつつ、重心を預けていた壁から背を離すところだ。

足音が、止まった。

「そろそろ」

次いで、笛の音も途切れる。

「出てきては如何ですか」

そうやんわりと促すのは涼やかな声。中性的な声質である。

「へえ。上手く隠れていたつもりだったんだけどな」

「ご冗談を。広範囲に向かって“探知”をかけていたでは有りませんか」

「生憎、そういう性分なものでね」

くす、と微笑して、祈響はひとつ靴音を響かせる。不意に涼やかな声が「ああ」と呟いて、

「まだ挨拶をしておりますでしたね」

得物を懐に入れ、それは慇懃に腰を折る。

素顔は深く被った黒いフードに隠され、見えない。けれど、その口元が美しい弧を描き、笑む。

「お初お目にかかります。『ローズロイヤル』指導者様」

跪くそれに肩を竦め、祈響は苦笑する。

「堅苦しいのは嫌いなんだが」

「それは失敬。ことういった性分ゆえ」

ゆっくりと元の姿勢に戻ると“それ”は口元だけ歪ませる。ク、と短く笑い、祈響は口元をほころばせた。

「『壊し屋』を前に、随分と落ち着いているじゃないか、“ハーメルンの笛吹き”とやら」

「そう装っているだけですよ。本当は貴方が恐くて堪らない」

「恐いんですよ、と。」

「そう告げる声音はどこか嘲笑が含まれていて。祈響はただその美貌に冷笑を浮かべるのみ。」

「だったら、その笛でこのオレを溺死させればいい。かの童話の通りにな」

「それは出来ませんよ。貴方の様な方を溺れさせる事など、到底叶いません」

貴方は鼠ではなく空を飛ぶ鷹ですから、と“ハーメルンの笛吹き”は薄く笑み、「けれど」と続ける。

「こんな僕でも…その鷹の羽をもちで、蒼空から墮とすことは可能かもしれませんね」

刹那。

青年の視界に、“ハーメルンの笛吹き”の姿は無く。けれどそれに動じることはせず、青年はチラ、と血色の瞳を背後に向けたのみ。

「……………」

パタリ、と地に落ちるのは青年の肩から腕を伝う赤だ。それでもまるで他人事のように表情を変えない青年に、“ハーメルンの笛吹き”は問う。

「痛みを」

青年の肩を刺した刃物にも、赤が染み着くようにまとわりつく。

「……………貴方は、感じないのですか」

問われて、青年の唇に笑みが浮かぶ。

そして夜風に良く響く声音が、応じた。

「さあ？ それなりに感じてるつもりだが」

「そうですか」

言って、刃物を再び懐に仕舞ってから、“笛吹き”はどこか憂いを秘めた笑みをこぼす。

「ああ…そろそろ“時間”ですね。僕は“戻ら”ないと」

聞いて、祈響が僅か笑む。

「そう簡単に鷹の眼から逃れられるとでも？」

「出来ますよ」

出来るのだ、と。

そう言って、“ハーメルンの笛吹き”はフードをより目深に被る。

そして呟くように、囁くように、言った。

「僕は」

月が、輝く。

「…何処にも居ない存在ですから」

言って、それは消えた。

風の如く。

まるで元々その場に居なかったかのように。

消えた。

「…何処にも居ない存在…か」

途切れた音色の余韻を聞きながら、祈響は月を仰いだ。  
血色の瞳がどこか陰りを映し、細められる。

「…“痛み”なんて、じきに感じなくなる。何も 感じなくな



る」

\*

「リッリーダーさんッ?! どうなさったんですか、その腕ッ」

顔面蒼白になって駆け寄ってくる依頼人に「ああ、これか」と祈響は他人事のように応じる。

「“ハーメルンの笛吹き”が去り際のキス代わりに寄越してな」

冗談めいた声音で笑う指導者に依頼人は慌てて告げた。

「とツとりあえず、そのの椅子に座ってください。止血しないとツ」

「ん? ああ、別にいい。上に居るウチの副長にやらせるから」

「でも……」

見ていられない、と目を伏せる依頼人に祈響はふと苦笑して、

「…この軀を女性に晒すには少なからず躊躇いを覚えるんだ。どうせ放つて置いても直ぐにどここうなるものではないしな」

だから心配無い、と笑む青年に依頼人は問う。

「貴方は痛みを感じないのですか？」

「…あの笛吹きにも同じことを訊かれたな。まあ、そうだな…感じない訳では無いが、“もう慣れた”というのが適切だろうな」

「……………」

黙り込む依頼人に祈響は笑んで、ふと壁掛けの時計を見やり、

「起こしてしまつて悪かつたな。部屋提供、感謝するよ」

そう言つと、祈響は階段を上つていった。

ACT・08 想いの残骸

「……毎度毎度手当てするこちらの身にもなれ、お前は」

呆れた、と言わんばかりのため息をつき、零は慣れた手付きで包帯を巻いていく。

「そう言いつつも毎回丁寧に手当てしてくれる副長さんには少なからず感謝してるよ」

くす、と微笑する青年を前にもう一度ため息をつき、零は巻き終えた包帯を箱へ戻した。

「……怪我、また増えたな」

今回の傷とは別のそれらを見て、零は言う。

「ん？ ああ、もう殆ど痛みは無いけどな。痕はそれなりに残るらしい」

消えないものだな、と祈響はふと自嘲めいた笑みを浮かべた。

羽織るシャツと上着で覆うようにして隠される“痕”。

それは、青年の瘦躯を縛るように、戒めるように、刻まれる痣と傷の名残。

それらが戦いの最中で負ったものでは無いことを、零は知る。

“可哀想に”なんて言葉では到底届かない様な。

「……」

「どうした、零。急に黙り込んで」

「…別に」

柄にもない。それに、目の前の青年は“同情”を何よりも嫌う。そんなものは偽善でしかない。

酷く、嫌う。

「しかし、こつも夜が続くと時間感覚がずれるな」

“朝の来ない街”だから仕方ないか、と青年は銀糸をかきあげる。

「時間帯から言えばとつくに夜は明けてる」

副長の言葉に「そうか」と頷いて、祈響は微笑。

「それじゃあ、依頼人も含めた作戦会議としよう」

例の人物との第一接触も済んだことだしな、と祈響はネクタイを締め直し、言った。

「ハーメルンの笛吹き”について…ですか？」

「ああ」

青年の言葉に依頼人は暫し考え込むような顔付きで俯く。

「ごめんなさい。子供を夜毎さらっていくこと位しか私は知らされて居なくて…」

「…そうか」

赤の眼に鋭い光を宿し、祈響は僅か頷いた。

「知らされていない」と言ったな。他に誰か情報源となるような人物が居るのか？」

「あ…いえ、情報源が特別いる訳ではないんです。掲示板が街の広場に有るので、皆其処から情報を得るんです」

「…成程な」

“外”からの情報がほぼ皆無なのだから当然だろう。  
結局“内”の情報を信じるしか無いのだ。

「……あの」

「ん？」

遠慮がちに掛けられた声音に、祈響は短く応じる。

「ハーメルンの笛吹き”は、本当に“居る”のでしょうか」

「…どういう意味だ？」

「私は思うんです。本当はそんなもの、存在しないんじゃないか…  
つて」

私の偏見かもしれませんが、と紡ぐ依頼人に祈響は微笑して訊いた。

「……………どうして、アンタはそう思う？」

「え？ あ、ええと、なんとなく、そんな気がして。…すみません、余計なことでしたよね」

頭を下げる依頼人に、青年は  
「別にいい」と告げる。

「ハーメルンの笛吹き”は存在しない…か”

青年はふと呟き、続けた。

「何か“都合”が悪くなったとき…人々は決まって自分とは別の、責任を転嫁させるべき『モノ』を求める。寧ろそうせずにはいられない…もしかしたら、あの笛吹きもその『モノ』なのかもしれないな」

そう告げる声音は、常になく淡々としていて。  
赤の眼だけが鈍く煌めいていた。

「…『モノ』…」

「偶像崇拜というヤツだ。それにこの世界の住人が抱く“想い”が  
反応し、具現化したのかもな」

“想い”

それは時に何よりも優しく、何よりも冷たい。

銀髪の指導者は、ふと冷笑を唇に浮かべ、続けた。

「だが、まだその“想い”が形になるのなら良い。形にならぬ“想い”など……この世界では“歪み”としか認識されない」

一方は善。一方は悪。

“想い”と“歪み”。

元を辿ればそれはきっと同等のもの。

「ま、それは後々分かるだろう。第一接触が済んだ今、相手の出方を窺う必要があるな」

“いつもの”笑みと声音で、青年は告げる。

「依頼人を狙ってくる可能性も踏まえて、零、護衛を頼む」

「……ああ」



「由良とライカ、広場の掲示板とやらの情報確認を頼めるか」

「分かった。祈響は？」

「オレは少しばかり別ルートの情報を調べてくる。…皆、異論は無いな？」

各々頷くのを確認し、青年は笑う。

「…それじゃ、会議はお開きにしようか」

\*

“朝の来ない街”に“昼”が訪れた。

しかし広場と形容されるであろう場所は、静寂を崩さない。

掲示板。

その手前に、由良は佇んでいた。

“ハーメルンの笛吹き”

目下情報収集中である件の人物についての情報を探る。

けれど。

(……あれ?)

無い。

子供達がさらわれたことも、笛の音のことも。

“ハーメルンの笛吹き”の情報が何一つ、無い。

まるで、元からそんな事件など無いかのようだ。

どういふことだろう、と思案するところだ。

風が、

揺れた。

それに乗り、聞こえてくる音色。

傍らにいるライカが低く、身構える。

闇色の“それ”はフ、と笑んだ。

「おや、“今宵”は可愛らしいお嬢さんでしたか」

空気が震えるのを、感じる。

間違いない。否、間違える訳がない。

片手には笛。目深に被ったフード。

ハーメルンの笛吹き。

「この街の方では有りませんよね。…ああ、あの指導者様のお供、  
と言うことですか」

さして興味なさげに、それは言う。

それと同時に金色の眼と、鋭利な牙が煌めいた。

刹那。

「おや、<sup>フライング</sup>“反則”ですよ、“付き人さん”」

煌めく牙は。

笛吹きの手 笛を持たない手に、押さえつけられていた。  
そのままライカはバランスを崩し、地に倒れ込む。  
笛吹きがくすり、と微笑し、由良の方へ視線をやる。

「…さて、付き人さんも倒れてしまわれましたよ？ どうしますか、お嬢さん」

問われて由良は半歩下がり、得物を構える。  
白銀に煌めく千本。  
名は無い。

“契約”では、無いから。

駆け出し、風が藍色の髪を揺らした。

くすり、ともう一度、闇色が笑う。

「可哀想に」

そう闇色が呟いた、刹那。

ドサリ、と。

小柄故の軽い音が 重く響いた。

足元には、自らの得物。

その先端を染める赤は、自らの血。

(…“音”で、跳ね返した…!?)

「…“契約”では、無いようですね。僕も嘗められたものです」

お返ししますよ、と千本を少女に投げ、笛吹きは踵を半歩返し、微笑する。

「ご安心を。僕は貴女と戦うつもりは有りませんから」

チラ、と刹那“付き人”の方を見やり、笛吹きは言う。

「……ずいぶんと寡黙なお嬢さんですね。まあ、それはさておき」

そこで一旦言葉を切り、刹那、歩み出した足を止める。

「貴女があゝの指導者様のお供なら…またどこかでお会いするかもしれませんね。その時の為にとつ、彼にお伝えください」

風の音。

ふわり、と揺れる。

「『僕』は何処にも居ません。ただひとつの場所を除いて』  
ね」

そして、

消えた。

「……ユラ、怪我……」

「大丈夫だよ。かすり傷だから」

慣れないながらも心配げに駆け寄ってくるライカに由良は「大丈夫」と笑んで、ふと思案する。

“ハーメルンの笛吹き”。

目深に被るフードの隙間から刹那覗いた瞳。

それはとても、哀しい眼だった。

\*

「あのリーダーさんって、どんな方なんですか？」

不意な依頼人の問いに、零は深緑の瞳を彼女に向ける。

「……………」

「以心伝心って言うんですけど。お互いに信頼しているように見えたので」

つい訊いてみたくなりました、と依頼人は屈託のない笑みで言う。

「……………」とにかく横暴だな。だが、あいつはあいつで重いものを抱えている。誰も届かないような痛みを、知っている」

「……………」とてもそんな風には感じられません。強い人なんですね、あの方は」

見かけだけではやっぱりヒトの本質って分からないものなんですね、と、依頼人は言う。

それと同時に、内ポケットから鈍い電子音。

「……………」

そういえば。

あの依頼の時、あの横暴指導者から受け取ったままだったと気付く。微磁気であると言う、ふざけた通信機。

「失礼」と依頼人に断り、零はソファから立ち上がった。

「……何だ」

あの時とは異なり、壁のせいなのか耳障りな電子音が暫く続く。返答が来たのがそれから数秒後だった。

『……ああ、まだ使えるようだな。零、ひとつ作戦変更だ』

「……」

沈黙を了解と取った祈響は続ける。

『近くに居るだろ？ 依頼人。“護衛”ではなく“監視”しろ』

「……監視？」

『そろそろ“相手”がしびれを切らす頃合いだからな。まあ、お前の事だ、こんな遠回しな表現じゃ納得しないだろうから結論から言うが』

通信機から一旦意識を外したのは背後の“気配”を感じたから。

「……どういづつもりだ」

それは通信の相手に告げたものではなく。

気配に感付き咄嗟に腕を掴んで止めた片手に果物用のナイフを握る



「 ……さつき、言いましたよね。ヒトは見かけだけじゃ、本質を見抜け無いんですよ」

“依頼人”は。

フ、と冷笑を浮かべる。

一度は意識を外した通信機から、再び声が聞こえた。

『そこにいる依頼人…それが今回の首謀者だよ』

言って、美声が続ける。

『まあ、そういうことだから。オレがそっちに戻るまでの時間稼ぎ頼むぞ』

「おい」

こちらの言葉を聞く前に相手が容赦無く電子音を切った。

零は舌打ちすると片手で契約を呼び出し、告げる。

「 『鬼身』 」

冷やかなその声音に呼応するように、“依頼人”の手からナイフが音を立てて滑り落ちる。

『鬼身』。

一言で表すならばそれは『金縛り』と形容するもの。形は無くとも、相手を縛りつけるそれを受け、けれど、“依頼人”はその唇に無理矢理笑みを作った。

「 こんなことを“私”にしたところで、無駄ですよ」

馬鹿ですね、とせせら笑いをこぼすそれには応じず、零は変わらず得物を構えたまま。

“依頼人”はふと諦めたようにため息をつき、問う。

「ねえ、副長さん。考えたこと有りませんか？ ……自分にとって一番大切な人が 大きな…本当に大きな“勢力”によって、殺された…いえ、その存在自体を抹消され、独り残された人の気持ちを」

尚も応えない『ローズロイヤル』副長に、“依頼人”は先程まではなかった刺々しい口調で言う。

「…きつと考えたことなんて無いですよね、圧倒的な“力”を持っている人は。いつも誰かの先に行く人は」

そうでしょうか？ とその唇が続ける。

「“私達”がその大きな勢力から負った“痛み”がどんなに辛かったか、分かりますか？ 今までずっと、堪えてきた痛みを」

「……………甘いな」

“依頼人”の言葉を遮るように、零がようやく口を開く。

とんだ妄言だ、と。

その冷ややかな言葉の棘に、“依頼人”は僅か顔をひきつらせる。

「え？」

「自分だけが被害者だと思うなよ。俺達はその程度の“痛み”など……………とうに慣れた」

抑揚のない声音に、触発されたのか、“依頼人”は刹那俯いた後、

叫ぶように言った。

「ッ、うるさいっ。あなたに　あなた達に何が分かるって言うんですかッ。何も…何も知らない『外』の連中が　」

「まあ、分かるつもりは無いけどな」

「！」

不意に割り込んできた澄んだ声音。

その主を“依頼人”は自由の利かない体のまま、睨む。

“それ”は、『ローズロイヤル』副長の背後にある窓際に居た。

窓枠に着いていた足を部屋の床に着かせ、左右異色の眼で、笑う。

「“時間稼ぎ”ご苦労様、零」

窓からひよい、と身軽に降りた指導者に、驚くことなくその副長は呆れたように言った。

「遅い」

「そうか？　これでも急いだつもりだが」

次いで、窓から由良を抱えたライカが降りる。

「…大体、窓から来る必要が何処にある」

「玄関が閉まっていたから。幸い由良達とも合流出来たし」

「……」

再度呆れたようにため息をつく零に微笑して応じる青年を前に、“依頼人”は刹那齒軋りをした。

さてと、と祈響は視線を“依頼人”へと移し、言う。

「『予定通り』にはなかなか進まないものだな。ああ、それはそうと、さっきアントアの“兄”に逢ったぞ」

聞いて、“依頼人”の表情が強張る。

「……兄？」

怪訝そうな表情で問う零に、肯定するように祈響は続ける。

「巷では“ハーメルンの笛吹き”と噂されてる」

そうだろうか？ と祈響が問いかける先は“依頼人”。

「客人。“ハーメルンの笛吹き”は」

「何処で」

唐突に“依頼人”が口を開く。

「その情報を得たのか知りませんが、それをあなた方が知って何になるんです？」

「それは勿論依頼完遂さ。それに…アンタ達に隠されたその更に奥の事実も、掴んだよ」

二、と不敵に笑む祈響に、依頼人が何かを言いかけた、刹那。

ふわり、と。

まるで元からその場にいたかのように、“それ”は居た。  
そして、言う。

「やはり 貴方は素晴らしい能力をお持ちのようですね」

“それ”が。

“ハーメルンの笛吹き”が笑う。

「……どうして」

唇を震わせて言葉を紡ぐのは依頼人。ハーメルンの笛吹きは、ふと視線をそちらに移し、微笑した。

「あの事実まで知られたとあっては、もう誤魔化しようが有りません。僕がどのような存在かも、ご存知ですね、『ローズロイヤル』指導者様」

「ああ」

祈響が、短く応じる。

「……ハーメルンの笛吹き」は想いの残骸から「造られた」……い  
わば思念体だ」



ACT・09 夜は千の鈴を鳴らす

太陽を《神》と畏れ、敬う街。

その神を失った今、『内部』にただならぬ執着心をもつ人々。

その思いが造り出したモノ      それが、“ハーメルンの笛吹き”。

その始まりだった。

\*\*\*

「そう。僕に実体は有りません。それゆえに、限られた時間しか実体化出来ない      それが、“ハーメルンの笛吹き”です」

ゆっくりと、語りかけるような口調で、笛吹きは言う。

「『妹』に代わり…僕がすべてお話ししましょう。でもその前に妹の拘束を、解いて頂きたい」

チラ、と深緑の瞳が指導者である青年を見やり、それに応じるように、赤の眼が頷いた。

『滅亡童話』が解かれ、依頼人の拘束も同時に解かれた。

ありがとうございます、と微笑してから、ハーメルンの笛吹きは言葉紡ぐ。

「太陽を《神》と恐れ敬う街からその神が奪われたのは、今から3年前　政府がとある研究を行うことになった頃」

やや自虐的な笑みをつくる笛吹きは、ふと窓の外に広がる闇を見つめ、続ける。

「その研究は　そう、純粋な“子供”の魂魄を使って兵器を造ると言う　云わば人体実験です」

「……人体実験は前々から禁止されている筈だろう」

訝しむように言ったのは零。ええ、と頷いてから、笛吹きは告げた。

「ですが、政府自らそれを黙認……訳も分からぬまま、“子供”達は街から連れ去られた……たかがひとつの兵器の為に」

そう紡ぐ唇に浮かぶのは嘲笑。心底　嘲笑うような声音だった。

「僕ら兄妹も　　当時はその候補に上がっていました。けれど妹は、妹だけは、逃れる術があった。何故なら」

「この世界に呼ばれたときから、“契約”を持つことが出来なかったから」

不意に、指導者である青年が言葉を引き継いだ。

“契約”を持たないと言うことは、魂魄に何かしらの“支障”があるということの意味する。

純粋な魂魄を必要としていた政府にとっては興味がなかったのだろう、と。

「そう。次々と抹消されていく“子供”たちの中　僕は妹を連れて脱走しました。……愚かなものですよ、当時の政府は。大勢を持ってしても、たかが二人の子供を捕えられなかったのですから」

口元にくすり、と笑みを浮かべる笛吹きは、続ける。

「そうして戻ってきた故郷……けれど、街の人々の反応は決して暖かいものではなかった」

笛吹きは、フードに隠された視線をゆっくりと祈響へと向け、言う。

「あからさまな拒絶、非難の眼差し……我が子は帰って来ないと言  
うのに、何故この兄妹だけ戻ってきた」、何故我が子では無いの  
か……彼らは無言で、けれど確かにその表情は、その眼は、告げ  
ていました。勿論、街に入れては貰えず、壁の外で過ごす日々が続  
きましたよ」

〔酷い……〕

スケッチブックをぎゅっと腕に抱き、目を伏せる由良に、笛吹きが  
苦笑する。

「この頃から人々は『外』に並々ならぬ恐れと憎しみを抱いていま  
したからね。しかしこのままでは、僕はともかく妹の身が持たない  
だから僕は、彼らにひとつ、提案をしました」

拒絶を露にする人々に、ひとつ提案をした。

「……彼らの我が子に対する“想い”を　僕が全て引き継ぐ、と  
言うものです」

“子供”達は帰って来ない。

けれどせめて。

それに対する想いを。

「それが僕に出来る唯一の事でした。それと同時に　妹を“生かす”、最後の希望だった」

「え……?」

その言葉に驚きをこぼしたのは依頼人。  
彼女に笑みだけ返して、笛吹きは言う。

「僕が負の“想い”を一身で受け止める。∴それで人々が納得すれば、妹だけは助かる……だったらそれを喜んで選ばうと」

しかし街の人々が抱える負の想い。

それはあまりにも強すぎた。

「当然、僕の身体は人々の想いに耐えきれず、実体を無くした“思念体”となり　それでも悲しみを拭いきれない人々の記憶は、現実を避けるように捏造されていきました。『我が子が帰って来ない

のはこの街に夜毎現れる“思念体”のせいだ。全ては彼のせいだ』  
…とね」

我等では政府に敵う筈もない。  
けれど、我が子は。

あの兄妹だけ。何故。

あの兄が我等の想いを受け止めるのでは無かったか。

ならばこの気持ちはあの子供のせいだ。

あれを見る度に我等は我が子を思い出す。

全てはあの兄妹が奪ったのだ

「自分たちの愚行を明らかにしたくなかったのか、掲示板にも僕の  
…“ハーメルンの笛吹き”の情報は無かった」

書いてしまえば自分たちの愚行を認めてしまうことになりますから  
ね、と笛吹きは微笑する。

「僕はそれでも構わなかった。妹さえ、人々に受け入れてもらえる  
なら」

ただそれだけで、良かった。

妹だけは。  
無垢な、妹だけは。

喻え太陽カミサマを無くした世界の中でも。

笑っていて、欲しかった。

ただ、それだけを願って。

「けれど　それももう終わりです。街に子供達はもい居ない。居ないのなら必要無い　政府はこの街を最初から無かったかのようにするつもりですよ」

唇にだけ笑みを浮かべ、笛吹きは自虐的に笑う。

「だから僕は、妹に貴方がたを呼んで欲しいと頼んだ。…“思念体”は外に出ることは出来ませんから」

貴方がたを呼んだのは他でも無い僕ですよ、と。

「もつとも」

言って、笛吹きはおもむろにフードへ手をかける。

目深に被っていたそれがパサリと音を立てて笛吹きの肩へ落ちた。

「理由は知らせませんでしたけど」

フードに隠されていた瞳にうつすらと笑みを浮かべ、依頼人と同じ顔で、笛吹きは言う。

祈響は短く笑って彼に訊いた。

「ならばオレ達をここに呼んだ理由は何だ？」

妹にも教えていないその理由とやらは、と問われて、笛吹きは刹那黙る。

けれど、静かに、そしてとても哀しい眼で笑って言った。

「その眼で、僕を」

けれど、それは不意に遮る声音に止められる。

「私を、殺して下さい」



笛吹きは弾かれるように、声の主を振り返る。紛うことなく、自らの妹だった。

「……リーダーさんなら、ご存知ですよ。契約を持たない者の末路を」

「……ああ」

静かに、『ローズロイヤル』指導者は応じる。

契約を持たぬ者。

それは神の恩恵を受けないに等しく、そう長くはこの世界に存在出来ない。

「薄々は、気付いていました。兄は何も言わなかったけれど……そういう行動をとるときほど、何かを抱え込んでいるヒトだったから」

言って、依頼人は微笑する。

「……そう経たないうちに、私は消える身……だから兄が自ら『死』を選び、貴方を呼ぶのだと気づいた時に私も決めたんです」

何かを言おうとして口を開く笛吹きに、良いんです、と依頼人は  
呟くように言った。

「最期ぐらい…」妹『に我が儘を言わせてください　　“お兄ち  
やん”」

「……良いのか」

青年が問う。

その双眸は『ローズロイヤル』指導者としての鋭い眼光を携えてい  
た。

ええ、と迷わず頷く依頼人を見つめ、兄である笛吹きは刹那瞳を伏  
せる。

けれど再び瞳を開け、唇に微笑を浮かべて首肯した。

その唇が、次いで言葉を紡ぐ。

「ではひとつだけ、訊かせてください。　　神に最も近いと噂され  
る、貴方に」

そう言う声音は凜としながらも揺れ、震えていて。

「……神様が本当に居るとしたら……何故僕らだけ愛してくれなかったのでしょうか？」

その問いに。

懇願にも似た、問いに。

『ローズロイヤル』指導者は刹那の沈黙の後、静かに応じる。

左右異色の瞳が、ほんの僅か揺らいだ。

「……神はお前達だけ愛していないんじゃない。誰ひとり　心から愛してなんか、いないんだ」

赤の眼が、鋭く輝く。

その光に包まれて、ふたつの“想い”が弾けた。

赤い左目を僅か細めて、祈響は光の名残を見つめた。

「……“想い”……か」

依然として静寂を保つ窓の外をふと見やり、呟く。

〔祈響？〕

「まだやることは多そうだな……」

〔ハーメルンの笛吹きはもう居ないよ？〕

「オレ達が依頼されたのは怪奇現象を解決する事。消えたものは戻らないが……まだ終わってはいないだろう？」

〔あ〕

気づいたらしい由良ににこりと笑んで、祈響は視線を移し様、

「 “朝の来ない街”の“夜”を、終わらせる」

「 ……『内部』に異常な執着を持つ連中に『外部』の話が通じる訳ないだろう」

そう冷ややかに告げる副長にフ、と笑んで、祈響は言う。

「ああ。だから逆にそれを利用させてもらうのさ」

言うなり片手にペンを持ち、次いで紙を広げて祈響はさらさらと文字らしきものを紙面に刻む。

「ん。 ……まあ、こんなもんか」

そう呟くと、祈響は視線を紙から外してライカを呼ぶ。

「ライカ。これを街の掲示板に貼ってきてもらえるか」

手渡された紙に僅か首を傾げる少年だったが、直ぐに頷いた。

駆け出して行く金色を見つめる青年に、由良が傍によって問う。

「何て書いたの？」

「ん？ ああ、さっきの紙か。……“私は先日、ハーメルンの笛吹きと接触しました。彼は私に様々な話をしましたが、どれも信じられません。どなたか、私に情報をくださいませんか。お願いします”」

語るような口調で内容を告げる指導者を前に、刹那の沈黙。

「少しばかりカマをかけてやったのさ」

そう笑う青年は、さて、と呟いて立ち上がる。

「これで連中は黙ってはいられない。どこの誰が書いたのかも分からない情報に、自分たちの愚行が明らかにされてしまう…それを回避すべく、奴等はその提供者を殺しにかかるだろう」

奴等は『内部』の情報を信じることしか出来ないのだから、と。

「此方も準備にかかろうか。現実を受け入れない連中の“殻”を叩き壊す為にな」

\*

何だ、これは。

“ハーメルンの笛吹き”が話したこと。

我等のことか。それとも他愛ない話か。

誰が書いた？

ハーメルンの笛吹き自らか？

いや、奴は思念体。そんなこと出来る訳がない。

ならばあの兄妹の 妹。

あの、妹か。

どうする？

どうすれば良い？

殺そう。

あの妹の方を。

あの妹も、思念体にしてやれば良いのだ

そう思うところで、前方から人影が見える。

おそらく提供者が新たな情報を見に来たのだろう。

ならば、その隙について 殺ソウ。

ひとつ唾を呑んでもむろに人影に近付き、それに刃物を向ける

否。

向けた、筈だった。

「あ………？」

その音しか、唇から出て来ない。

背後。

背後から。

止められた。

それに意識を移して、けれど、絶句する。

「ふーん……こんな物を振りかざすとは…随分と気が立ってるな」

見慣れない銀色が、其処に居た。

「だ、誰だっ」

かけられた誰何の声に、銀色が笑う。

「ん？ 訊いたところで別に何が変わる訳じゃないが…まあ、教えてやるよ」

くすり、と形の良いその唇が歪む。

「『ローズロイヤル』 通称『壊し屋』の、指導者さ」

聞いて、誰もが息を呑む。

『外部』の情報に疎い我等でも、その人物は知っている。



否、

知らない筈がない。

間違いない。

銀の髪。漆黒の右目に、紅の左目。

彼だ。

壊し屋を率いる指導者だ。

\*

『ローズロイヤル』指導者はふと左右異色の双眸で辺りを見回して、嘲笑を唇に浮かべた。

「…成程。少数が企んだことかと思いきや、街の住人全員とはな」

青年の銀髪が僅か揺れ、夜風がやけに冷たく、通りすぎる。

「老若男女、皆が皆自分達の愚行を隠蔽する為にあの手この手が……まったく、くだらないな」

住人はぐうの音も出ない。青年の良く響く美声だけが、告げる。

「せつかくの機会だ。お前らの『殻』…跡形もなく壊してやろうか」

くすり、と青年は美貌を笑みに歪める。

「 さあ、《太陽》<sup>カミセマ</sup>の再臨だ」

“太陽”<sup>カミ</sup>の再臨。

それは文字通り、この街に太陽が戻ると言うこと。  
壁を、壊すと言うこと。

「な、そんなことをしたら」

「その壁には磁気が…猛毒が」

「政府が黙って」

「政府？」

矢継ぎ早に言われる言葉を遮るように、あからさまな嘲笑を唇に浮かべ笑う青年。

その左目が 艶やかに紅い。

「『政府のせい』…『政府には逆らえないから』…もっともらしい理由をつけて、いつまで現実から目を背けているつもりだ？」

くすり、と笑って青年は続ける。

「自分を正当化し…挙げ句の果てには責任転嫁か。太陽が居て困るカミサマのは、あの兄妹ではなくおまえらだろっ?」

神は全てを知り。

太陽は全てを曝け出す。

愚かな住人どもだな、と青年の美貌がせせら笑った。

「この街の壁に込もっているのは磁気なんかじゃ無いんだよ。おまえらの邪念だ。だからその“想い”ごと オレが壊してやる」  
追い撃ちをかけるように告げる声音に、住人たちがようやく反抗の意を込めて発した言葉は、けれど、夜風に かけ消える。

住人たちは誰ひとり動かない。

否。

動けない。

体が金縛りにあつたかのように、動けない。

それを見透かしたかのように それが計画通りだと言うように青  
年がくすりと微笑してから、自らの左目に手を翳す。

銀糸がせわしく揺れ、その唇が刹那笑みを消した。  
ひやり、と僅か冷たい声音が、終わりを予告する。

赤の光。

それが一瞬にして広がり、“想い”を砕く。

砕かれたそれから溢れてくる白い光に、皆が皆、目を眩ませる。  
そして誰かが呟いた。

神様、と。

暖かく、そして何よりも美しく優しい。

《カミサマ太陽》。

それは名を無くしたこの街の、唯一の証。  
最も恐れ敬うべきもの。

住人たちはひとりふたりとその頬から透明な雫をこぼす。  
いつしか“金縛り”は解かれていた。

「ご苦労、零」

祈響は笑みを浮かべて、契約を閉じた副長に言う。

傍らの少女と少年にも笑み掛けて、左右で色の違う瞳が《神》の戻った街の蒼空をふと仰いだ。

「…さて、帰ろうか。報酬を貰う依頼人も居ない事だし」

オレ達も戻るとしようか、と踵を返し、青年が笑むところで。

リン、と鈴の音が何処からか響いた。

次いで、声音。

「相変わらず派手なこととしてはりますなあ」

赤の瞳が声の主を振り返ると、人影がふたつ。

その一方が、高く結い上げた長髪を揺らして、立ち上がる。そしてにこりと笑んだ。

「久しぶりやなあ。祈響はん」

独特なイントネーションをまじえたその声音は明るく、その笑みは決して裏を見せない。

「……東雲しのぶ」

「依頼終わったみたいやから来たんやけど。俺、自分にちよいお願いしたいことあんねん」

「『雪月花』指導者が自ら出向くような用件か？」

「まあ、そやな。もうあんま時間もないさかい、手短かに言わせてもらうけど」

『雪月花』指導者は刹那笑みを消して、言った。

「俺らの為に、死んでもらえんか？」

ACT・10 瞳の住人

「オレに他者の為に死ねと？ … 愚問だな」

冷やかな笑み。常でない冷えた声音で、祈響は笑う。

それを見やり、『雪月花』の指導者は苦笑。

「そう言われるんはある程度予想してたんやけどな。俺らにもそろそろ限界が来てんねん」

「何の限界だ？」

分かっているくせに、と言わんばかりの口調で、東雲は告げる。

「お向かいの指導者さんがな、臨戦体制に入ったんや。元々考え方が俺らとは違うさかい、嫌われてるのは承知済みな訳やけど」

聞いて、ああ、と祈響が言う。

「ああ… 『マリゴールド』の連中か」

東の『雪月花』を保守的と例えるならば。

西の『マリゴールド』は革新的と言ったところ。

このまま“戦争”に発展するにしろ、しないにしろ、中立の立場である『ローズロイヤル』が邪魔な訳だ、と祈響が笑う。

「組織の大小にかかわらず指導者を狙うのは基本中の基本だしな」

「せやな」

言った刹那、空気が震えた。

「……」

抜き払われたのは、黒き刀。

青年の銀系がはらりと地に落ち、その白い首筋にその刃がピタリとあてがわれる。

『雪月花』指導者である東雲の“契約”  
『漆黑拡散』  
だっ  
た。

「その指導者の首の根を狙うのも基本的な訳やけど…落ち着いたもんやな、表情ひとつ変えんとは」

「“昔”からオレに刃を向ける輩は数多く居たんでな。今更そう驚かないさ」



「さよか」

グ、と刃に力が込められる。その先端が僅か赤に染まった。それでも尚表情を変えない青年に、東雲は僅かの皮肉を孕んだ声で呟く。

「『神様に最も近い者』、『神の寵愛を受ける青年』　　そんなごたいそんな肩書きを持つとる自分でも……案外簡単に殺せたりしてな？」

「…そうになったらオレの代わりにウチの副長がお前を殺すだろうな」  
見かけに寄らず血の気が多い奴だから、と赤の瞳だけ動かして、祈響は言う。

その言葉にフ、と笑って、東雲は告げた。

「…せやったら、試してみてもええかもな」  
黒が煌めき、銀が揺れる。  
「…アカン」

東雲がぼつりと呟く。

「…空、曇つてもーた」

刀身が、“無い”。

今の今まで其処に存在していた東雲の契約 『漆黒拡散』 の  
刀身が“消えて”いた。

まるで太陽の元に存在する影のように。  
まるで光の元に存在する闇のように。

「まあ、天気には逆らえへんもんなあ…」

仕方がない、と東雲はため息をひとつこぼして契約を仕舞う。  
今までの冷たい雰囲気を払拭するようにニコリと笑んで、彼は言っ  
た。

「無茶言つてすまんかったな。…ほな、帰るで、天音<sup>あまね</sup>」

促された『雪月花』副長が僅か困惑の色を表情に浮かべ、応じる。

「…ええんか」

「ああ、ええよ。お疲れのところを長く引き留めんのも悪いし」

行くで、と微笑んで『雪月花』指導者は踵を返し けれど、立ち

止まる。

「あ、そうや　ひとつ、忠告しといたる」

言って、笑う。

「たまには“下”も見んと…狩人に容易く狩られて終わりや。そうや無くても　鷹は目立つんやからな」

屈託の無い笑みを浮かべて、東雲は続ける。

「気いつけや。『狩人』はすぐそこまで来てんで」

その刹那。

リン、と鈴の音が響き、ふたつの影が消えた。

「…つくづく理解出来ないな、あいつは」

眼鏡を直し半ば呆れたように呟く零に祈響は笑みかける。

「あはは、でも窮地に立たされた鼠は猫をも凌ぐからな…どうなることやら」

あたかも他人事の口調で、祈響は帰ろうか、と笑った。

\* \*

「何や、不満げやなあ、天音」

「……そういつ自分はえらい上機嫌やね、東雲」

笑う指導者に、天音は自身の金色の髪を揺らして問う。

「…何で、殺さなかったんや？」

あの時。

太陽が隠れるほんの一瞬でも前に力を込めていたなら、あの青年を殺せていただろう、と。

怪訝そうな表情のままそう訊くと、相手が笑う。

「そうしても良かったんやけどな。…ああ、ちやうか…そうさせてもらえへんかったんやるな、あの場合」

自らに言い聞かせるような東雲の口調に天音が僅か首を傾げると、

「気まぐれや」と相手が微笑して、言う。

「しかし変わってへんなあ、祈響はんは」

「……何がや」

「攻めてるんはこつちやのに、どうも詰めきれへん。それだけやない、訳の分からん“恐れ”を覚えさせられる…まるで神様と、おんなじや」

まだ手の震えが止まらへんわ、と東雲は自らの手のひらをふと見つめて苦笑する。

「…自分がそこまで言うの、珍しいな」

「そか？ 俺らはお向かいさんとのこともあるさかい、祈響はんには世話んなるかもしれへんなあ…ま、気長に構えて行こか」

不意に射し込んできた太陽の光を仰ぎ、東雲は笑う。

「お、晴れた。まだ神様はへソ曲げておらんようやな」

「…?」

意味が分からず再度首を傾げる副長に屈託ない笑みを投げかけて、

「はよ向こうに帰って、桜見ながら団子でも食べようや、天音」

リン、と鈴の音がどこか遠くで、響いた。

\*\*\*

「…零」

淹れたてのコーヒを片手に『ローズロイヤル』指導者は左右異色の双眸を副長に向ける。

「……………何だ」

そう応じると、青年がどことなく不機嫌さを孕んだ声音で言う。

「和風パスタ」

「……………は？」

「いい加減腹が減った」

三日前の昼から何も食べてない、と青年が告げる。

ああ、と零は内心納得した。

“ハーメルンの笛吹き”の依頼が来たのは丁度昼時。依頼先では殆

ど何も食さないこいつにとっては、言う通り二日前から何も食べていないに等しいのだ。

「……と言っわけだから。零、オレがシャワー浴びて帰って来るまでに作っておけよ」

言うだけ言って、青年は扉の外に消えた。

「……………」

零は消える銀色を見送り、そして気付く。

違和感。

否。“気配”、だろうか。

「……………馬鹿馬鹿しい」

そう吐き捨てるように呟くと零はソファから立ち上がる。

テーブルには飲み干されたコーヒーカップから僅かに湯気の余韻が漂っていた。

\*

降り注ぐ透明な雫に、銀色が濡れる。

雫は細いそれを伝い、青年の白い頬を、首筋を、肩を、腕を、湿ら

せていく。

伏せられていた長い睫毛がふと開き、双眸を同じく濡らした。

「……」

青年が己の左瞳 “幻葬の瞳” を片手で覆い、呟く。

「…… “神様は何故僕らだけ愛してくれなかったのか” …… か」

温かな雫とは対照的に酷く冷えた声音で、青年はひとりごちる。  
全てを嫌悪するかのような声音で。

「……くだらない」

緋の眼を僅かに細めると、青年は温かな雫を止め、荒々しい手付きで己の銀色を拭き、掛けてあったシャツを羽織る。傷跡を、覆い隠すように。

「…… 本当に、くだらない」

\*

「……ん。美味しかった。ご馳走様」

注文した品を容易く平らげ、祈響はフォークを置く。  
半乾きの銀髪をかきあげる青年を深緑の瞳が凝視した。

「……」



「…？ 何か言いたげだな、零」

「…お前、その眼に…今どのくらい“侵食”されている」

「…気付いていたか。流石だな」

薄く笑んで、祈響はソファに背を預ける。

「いいから答えろ」

はぁ、と青年は刹那ため息をついてかきあげた銀髪をおろす。  
左右異色の瞳がふと伏せられた。

「…五割、といったところか」

祈響は一拍置いて、言った。

“幻葬の瞳”。

あまりにも強すぎる存在が故にそれ以外の名を持たぬ眼。

青年の左眼に収まるそれは、“切り札”と言つには切れ過ぎる。

「…そんなに心配するな。自分のことくらい、熟知してるさ」

祈響は他人事のように笑った後、呟く。

「………“まだ”大丈夫だよ。まだちゃんと、“痛み”を感じられる」

だからまだ大丈夫だ、とその声音は告げる。

「……………」

無言でその視線のみ向ける副長にフ、と微笑んで青年は言った。

「それじゃ、オレは此処で仮眠をとることにするから。始末書その他諸々、あとよろしく」

愛用のソファに体を預け、瞳を伏せる青年。程無くして、微かな寝息が聞こえてくる。

“痛み”。

それを感じるのは“自分”で在ることの証だと、青年はいつかに言った。

まだ痛みを感じられる。忘れてはいない。

“まだ”

それはいつまで“まだ”なのだろう。

もし。

こいつが“痛み”を感じる事が出来なくなったら。

その時は

…

\*

静寂。

銀色が窓辺の月に照らされ、煌めく。

ソファの上で仰向けになったまま、青年はひとりごちる。

「……“もうひとりの神”：“太陽を神として崇める名も無き街”  
……なかなか面白い余興だった」

乾いた声音が刹那笑う。その双眸がふと窓の外を見やり、形の良い唇が“その名”を呼ぶ。

それは天地創造の神。

それは総てを操る“幻葬”。

自嘲めいた声音が、その名を呼んだ。

“貴方は”、と。

「これも全て手のひらの中だと言っのなら……貴方は次の駒をどう動

かす？

「夢夜」

独白のように紡がれた言葉。

けれど、それに呼応するかのように、“気配”が具現する。

長く美しい、白銀の髪。

その美貌に浮かべる神々しい微笑。  
そして。

右の、緋の眼。

それらを携えて、“神”が応じた。

「自ら振った賽の目に従うだけのことですよ

愛しい我が子」

「由良？」

呼ばれて、少女は我に返る。

「どうした？ 上の空だったか」

“指導者”である青年の言葉に、由良は紙面にペンを走らせた。

「ごめんなさい。大丈夫」

何でもない、と紡ぐと青年はそうか、と笑む。

「…それじゃあ、話を戻そうか。零」

続きを頼む、と促されて、零は淡々と書類を読み上げる。

「『先日、闇黒隔離西区に拠点を置く『マリゴールド』が同じく東区を治める『雪月花』に宣戦布告。両の指導者並びに組織が既に臨戦体制に入る』」

その続きを引き継ぐように青年は告げる。

「これについては先程言った通り手出しは無用だ。低能な挑発に乗るようなお前らではないと思うが、自分の立場を考えることを忘れるな。以上。何か異論の有る奴は居るか」

左右異色の双眸で一通り団員達を見渡した後、各自解散、と良く通る美声で指導者は微笑した。

団員達が去った後。

ひとつため息をついて、祈響は事務室のソファに腰掛ける。

「コーヒー、と副長に命じると自身は上着を脱ぎ捨てた。

「まったく…いつかに結んだ“平和条約”は何処に行ったのやら」

「……それは今の指導者達が結んだものでは無いだろう」

「この世界が造り出されてまもなくのことではなかったか、と零がコーヒーを片手に告げる。

「…ああ、そうだった。まあ、あの二人が指導者になってから常に飽和状態だったしな」

「今更それが弾けようとそう驚きはしないけど、と祈響はコーヒーを受け取ると微笑した。

「……」

「…“何を呑気に”…とても思っているか？ 零。だが奴等が殺気立ってるのにこちらまで殺気立ってどうする。ただでさえ血の気の多い同胞達が手に負えなくなるぞ？」

「…解っている」

零が無然として呟き応じる。傍らに居た由良が紙面にペンを走らせ  
た。

「でも、本当に戦争が始まったらどうするの？」

既に両組織がその手前の状態。

戦争が始まれば中立と言えども『ローズロイヤル』に少なからず影  
響が出るだろう、と。

問われて、祈響は微笑した。

「始まらないよ。特に東雲はこんなところで無駄な戦争はしないだ  
ろうね」

「……その根拠は」

「勘。もしくは」

青年は脚を組み直し、唇に笑みを浮かべる。

「“神の御告げ”…かな」

なんてな、と笑う青年を前に副長が馬鹿馬鹿しい、と呟いたと同時  
に、傍らの電話が鳴り出した。

祈響がそれを取り、短く返答する。

ふ、とその美貌から笑みが消えた。

赤の眼を鈍く煌めかせながら祈響は無言で受話器を耳に当てている。  
程無くして、「分かった」と一言発した後、祈響は受話器を置いた。

「どうかしたの？」

「そのようだ」

銀糸を揺らして脱ぎ捨てた上着を片手に立ち上がると指導者が言う。

「……依頼完遂の連絡を受けていた同胞達が　全員殺された」

「戦闘で殺された訳ではないと言うことか」

「ああ。依頼ではほぼ無傷だったと連絡を受けていた。事が起こったのはその後だ」

おそらく奇襲か何かを帰路で受けたのだろう、と祈響は唇に冷笑を浮かべたまま、言う。

「…とにかく、同胞達が殺された事に変わりはない。行くぞ、零」

「私も」

上着を翻す指導者に由良は紡ぐ。応じるように、祈響は告げた。

「いや、由良とライカは待機だ。…現状は恐らくお前達がまともに見られるものじゃない」

「分かった。気をつけてね」

「ああ。じゃあ、頼んだぞ」



パタン、と事務室の扉が閉められた。

\*

「……ある程度は予想していたが……まさかここまでとは」

乾き、黒く変色した赤き華に触れ、祈響は呟く。

「どうだ、零」

銀糸を揺らし、祈響は振り返った。

「急所をピンポイントで刺されたのが5人、原型を留めていないのが8人」

「手口がふたつに別れているところをみると二人以上か」

「おそろくな」

「得物は？」

「小型の刃物と大型の鉈のようなものだろう」

「…いや、多分前者は合ってるが後者は違う」

祈響は告げる。

「鉦じゃない。斧だ」

「斧？」

「ああ。契約の名残がまだ残ってる。いや、残したと言った方が的確かもしれない」

「…作為的なものか」

「おそろくな」

乾いた華に触れたまま、祈響は言った。

「…成程。これがあいつの言う『革命』か」

「…何？」

「よく『マリゴールド』指導者がぼやいてたんだよ」

「この奇襲は『マリゴールド』の連中が企てた、か」

「正解」

言って、祈響は微笑する。

「臨戦体制であることを良いことに、中立であるウチにまで視野を広げてきたらしいな」

言って、青年はもう一度事切れた同胞達の前で屈み込んだ。

「“手出しをするな”と言ったのはオレだったな。それを忠実に守ってくれたことに、心から感謝するよ」

忠誠を尽くしてくれたことに感謝する、と。祈響は刹那眼を伏せ、告げる。

「この地で、ゆっくりと眠ってくれ」

ザア、と空気が揺れる。

事切れたそれらに、青年が呟く。

「お休み」

\*

〔十三人も〕

悲しみに顔を歪ませて、由良は眼を伏せた。

「…『マリゴールド』は革命と称して度々こういった事を平気でやってのける。最近は大入しくしていると思っただけだ…」

『ローズロイヤル』が『壊し屋』と呼ばれるのと同じく、『マリゴールド』は通称『狩人』と呼ばれる。

連中がその気になればこれくらいの事は造作もなくやってのけるだろう、と祈響は赤の鋭い眼光を携えて言う。

「恐らく連中の革命はまだ終わらない。『狩人』がこの程度で満足する筈がない」

特に『マリゴールド』指導者は、と。

言って、祈響はそうだろう？ と零に笑いかける。

「……何故俺に振る」

「あいつのことはオレよりお前の方が良く知ってると思ってな」

「……昔の話だ」

零が冷ややかに応じ、祈響はそうか、と再び笑む。

「まあとにかく……此方も早急に対応を考えないとな」

「でも、どつするの？」

「そうだな…零、とりあえず同胞達にこれまで以上に警戒するよう  
通達してくれ」

「相手は組織の指導者だ。その程度の意識で状況が変わる訳無いだ  
ろっ」

「それくらい分かってる。だが此処でこちらから喧嘩をしたらそれ  
こそ売り言葉に買い言葉だ」

だからここは留まるしかないんだよ、と祈響は言う。

「安心しろ。その時になったら鷹も牙を剥く」

\*

「…連絡終わったぞ、祈響」

「ああ…」苦労様

青年はふ、と微笑して組んでいた足を組み直す。

「…なあ零、今回の革命…何かもつと別の意味があると考えら  
れないか？」

「中立である『ローズロイヤル』が邪魔だ、と言ったのはお前だろ  
う」

「初めはそう思った。だがもしかしたら」

銀糸が揺れる。

憶測の域を出ないけど、と祈響は告げる。

「“神”を引きずりだすつもりなのかもしれない」

「幻葬を？」

「仮定の話だけだな。オレの“背景”を連中が調べているとしたら、  
有り得なくは無いだろう？」

『ローズロイヤル』指導者の背後。  
幻葬の存在。

「自分の知らない所で自分のことを探られているのはなんとも不快  
だが…政府に小言を言われるのも不愉快だしな」

ましてや相手が三大組織のひとつとなれば連中は黙っていないだろ  
うし、と祈響は言う。

「此処は同胞達を信じて様子を見るとしよつか」

\*

翌日。

「止まった？」

怪訝そうな零の言葉に、祈響は告げる。

「ああ。あれ以降同胞は誰ひとり被害を受けていない」

「“革命”が終わったってこと？」

「……いや、その逆だ」

多分“革命”はまだ余興の域だったのだろう、と青年が言うところ  
で。

窓に影が映る。

ふたつ。

光を遮り、影であっても確認できる程の大きな得物。  
それが振りかざされ、硝子が割れる。

「…全く…」

ため息まじりに呟き、祈響が唇に薄く笑みを浮かべる。  
そして言った。

「“招待状”を出した覚えは無いんだが？」

『マリゴールド』

『マリゴールド』と。  
呼ばれて、相手が笑う。

後ろで緩くまとめられた色素の薄い長髪。  
同じく色の薄い瞳を細めて、それは言った。

「なに、悠々と空を舞う鷹を狩りに来ただけの事だ  
ロイヤル」

☐ローズ



ACT・12 狂詩曲

「親しき仲にも礼儀あり」だろう？ 『マリゴールド』」

「慇懃無礼」と言う言葉を知らないか、『ローズロイヤル』」

両指導者は言葉を交わすと短く笑う。

『壊し屋』を率いる指導者と『狩人』の名を持つ指導者が正面で向かいあい、ビリ、と空気が震え始める。

けれど動じぬまま、祈響は凜とした声音と言った。

「標的探しなら他をあたってくれないか。オレ達にはまだやらなきゃいけない事が山程有るんでね」

「理想郷」か。実に下らない」

下らないな、と『マリゴールド』指導者はせせら笑う。

「夢だの想いだの心だの……この世界の住人は腐っている。理想郷」、桃源郷……そんな妄想に過ぎぬ架空物、目指したところで無駄と言うもの。現実から目を背け終いには“神”などと言うモノにすぎり付く 実に愚かだ。だからこそ我々の『革命』が必要不可欠なのだよ」

「『革命』を起こすのは結構だが…他人の“夢”にまで干渉しないでもらいたいね。それに」

赤の瞳が、僅か細められる。

「夢を見るのが愚かかどうかは自分で決めることだろう?」

だからお前に干渉する権利は無い、と青年の冷やかな眼光が告げる。

「そう思うこと自体が愚かだと言っ」

「構わないさ。この組織の同胞達はその“愚かな”奴の集まりだからな」

「…指導者が指導者なら団員も団員か。所詮は『壊し屋』だな」

「されど『壊し屋』を」

くすり、と笑って祈響は応じた。

「…話にならん」

「そつだな」

堂々巡りもいいところだ、と両指導者は笑みを浮かべる。

ふと『マリゴールド』指導者が言った。

「頭まで腐っていないなら、良く見てみると良い…今こそ革命が必要不可欠な時代だと分かる筈だ、『ローズロイヤル指導者』」

今こそ革命の頃なのだ、と。

言った刹那。

『マリゴールド』指導者の手のひらから契約の光が放たれ、大きな影が再び具現する。

斧。

『クリムゾン』と呼ばれる、それぞれのもの。

それは迷い無く 少女へと向かう。

「 由良ッ」

金色の瞳の少年よりも。

深緑の瞳の副長よりも。

一番に。

銀色が、動いた。

その刹那、真紅の名を持つ得物が、振り降ろされる。

揺れる銀糸。

水を打ったように、沈黙が訪れる。

けれど不規則に滴り落ちる赤の雫が、それを破った。

次いで、声音。

「 ……無事か、由良」

そう紡がれる声音は、いつもそうと変わらない。だがその肩から腹

にかけての生々しい傷が、その“事実”を物語っていた。

「ほう　己の身を挺してまで小娘を庇うか。随分とお優しい事だな、祈響」

「…そういうお前は、随分と悪趣味になったじゃないか、常陸ひたち」

「レディーファーストと言っただろう？」

「ならウチの補佐はとんだ似非紳士に目をつけられたものだ」

危うく狩られるところだった、と祈響は口元に笑みを浮かべる。

『マリゴールド』指導者も笑みで応じ、得物を退いた。

その尖端に付着した赤が床に弧を描く。

「そう深傷を負って尚焦りひとつ表に出さないか。流石は“化け物”だ」

突き付けられた皮肉にも、祈響は冷笑で応じる。

「ならオレは精々“化け物”らしく、お前を殺めてみようか、常陸」

言って

左右異色の瞳がす、と細められる。

「…ほう」

常陸が呟く。

「『ブラッディ・サイレンス血の静寂』 契約主の血を媒体とし、具現する鎖…か」

赤の契約の光。

具現する漆黒の鎖。

それは床に弧を描いている赤の線から。

『マリゴールド』 指導者の首を締め付けるように蠢いたそれに、貴様の傷口から流れ出た血がその媒体と言うわけだ、と常陸が口元を歪ませる。

「体内だけでなく体外に流出した血までも操るか…無様だな」  
実に不恰好だ、と嗤う『マリゴールド』 指導者を左右異色の双眸で見やり、祈響はやおら体勢を立て直す。  
その刹那鈍い鎖の音が『マリゴールド』 指導者に首元を僅かに締め付けるよう。

「…お前が『クリムゾン』を振り下ろすのが早いか、オレの『ブラッディ・サイレンス』がお前の喉笛を潰すのが早いか だな」

試してみるか？ と祈響が余裕を含んだ笑みで問う。  
刹那の沈黙の後、常陸は短く嗤った。

「あくまで中立を決め込むか、『ローズロイヤル』。どちらにも手を貸さずただ政府の“影”として在り続けると？」

「オレにとってはお前らがどうしようが無関係いんでね。政府にいつまでも従うつもりは毛頭無いが……オレは『ローズロイヤル』を“理想郷”へ導く為なら手段は選ばない」

赤の瞳がそう告げると、常陸は言う。

「つまらんな。なかなか爪きりひだを見せない貴様にしびれを切らし  
て、『狩人』自らが直々に出向いてやったというのに、抵抗という  
抵抗を見せない」

興醒めだ、と。

言って常陸は優雅な足取りで踵を返す。

「ッ」

契約の具現を解き、どう見ても「無防備」と取れるその背後に金色の瞳を携えた少年が牙を向けようとするところで、

「止めろ、ライカ」

『ローズロイヤル』指導者がそれを制する。

「成程。駄犬よりは少しばかり賢明な判断をするようだな、  
祈響」

「これでも指導者だからな」

お褒めの言葉をどうも、と祈響は皮肉げに笑う。

振り向くことはせず、罅割れた窓から外へ跳躍する手前、常陸がふと背後に控える自らの副長に声をかける。

「……戻るぞ、雄飛」

雄飛、と。

その単語に、祈響に未だ庇われたままの由良が反応する。

「……はい」

応じる声音。

明るい褐色の髪を揺らした少年だった。

先に姿を消した指導者の後を追うように窓枠に手を掛け、けれど、ふと思いつまみいったように室内へその褐色の双眸向けた。

「……噂通りですね。その髪も、その眼も」

その銀髪も、その赤の眼も、と。

少年は大人びた口調で淡々と告げる。

「“噂通り”の“化け物”を見た感想はどうだ、少年？」

あからさまな嘲笑で応じる青年に、「特にありませんよ」と少年が言った刹那、由良が動揺を隠せないまま紙面に文字を紡ぐ。



「雄飛？」

それに気づき、少年は視線を移動する。  
そして。

「……………由良……………」

褐色の瞳にふと別の色がよぎって、けれどそれを振り払うように、  
雄飛は踵を返す。

「……………ごめん」

そう一言呟くと、指導者の後を追うように外へ消えていった。  
本来の役割を失った窓硝子を赤の目で見つめ、祈響はやれやれ、と  
肩を竦めた。

「…窓硝子だけでなくソファも使い物にならないな…」

気に入ってたんだけど、とため息をつき、背後を振り返る。

「…由良、怪我してないか？」

呼ばれて我に返る少女の髪を青年が撫でようとするとところで、

少女の瞳から一筋の雫が零れた。

「…由良？」

それは頬を伝い、スケッチブックに落ちて、紙面の黒字を滲ませる。

「ごめんなさい。私のせいで」

「…お前が無事ならそれで良い。…怖い思いをさせて悪かったな」

左右異色の瞳が微笑して、青年が涙を指の先で拭う。

「落ち着くまで休め。オレなら大丈夫だから」

促されて、由良はライカと共に、事務室の扉を開けた。

少女が扉を閉めた後。

祈響は壁に背を預け、浅く息を吐いた。

「……少しばかり、血を流しすぎたかな…思いの外、体が冷える」

「……無茶のし過ぎだ、馬鹿」

零は自らの上着を脱ぎ、祈響へ放る。

それを受け取ると青年は苦笑した。

「少しぐらいは褒めてくれても良いんじゃないか？ 今回の犠牲は窓硝子と愛用のソファだけなんだから」

極力犠牲は減らした、と祈響は力なく笑み、負った傷の痛みにも僅か顔を顰めて続ける。

「…っ、全く………こういうときはかりは願うな…“痛み”など感じなければ良いのに………」

「 ……それは」

零は言いかけて、止めた。

ぐら、と、青年の瘦躯が傾ぐ。

それを反射的に受け止め、零は思う。

冷たい。

“あの時”と、同じように。

馬鹿馬鹿しい。

浅くため息をついて、零は祈響を抱え医務室へ向かった。

\*

「ねえライカ」

少女は傍らの少年に問いかける。

「私、何やってるんだろ」

藍色の瞳が歪む。

少年の瞳が暫し考えるように細められる。

スケッチブックを抱きかかえるようにして、由良は眼を伏せた。

祈響。

自分は“指導者”である彼を補佐する立場にあるのに、逆に護られ

て。

何を、しているんだろう。

不意に、考え込んでいたライカが寄り添ってくる。そしてひとつひとつ慎重に言葉を選ぶようにして、告げた。

「ユラのこと、キキヨウ心配してた。だから、今はゆっくり休むこと、大事だと思う」

僅か視線を上げると、金色の瞳と交わる。

「うん。そうだね」

由良は文字を紡いだ。

それと同時に、脳裏にもうひとつ人影が浮かぶ。

幼馴染で“あつた”、彼。

雄飛。

\*

『ローズロイヤル』 医務室。

零がその扉を開けるや否や、椅子の音と共に人物が振り返る。

「……あら、アンタが抱えてるのって、もしかしなくてもリーダー？」

そう紡ぐ唇は紅い。

長く細い脚を組み替えて『ローズロイヤル』専属医

桜霞おうが

は

言った。

意識をとくに手放した銀色を覗き込むと、

「相変わらず色白ねえ。羨ましい……って、そうじゃないわよ。どうしたの、この傷」

「……『マリゴールド』の連中だ」

前半の内容には触れず、零は手短に説明した。

「……ああ、彼らね。その指導者とやり合ったってんじゃない、無理もないわね」

大袈裟にため息をつく桜霞が慣れた手付きで止血する。

「はい、一応血は止まったわ。まあ、無理はしないように言っといて頂戴」

言って桜霞は椅子から立ち上がる。

「どうせこれから小難しい話でもするんでしょう？ だったらアタシはさっさと自室に退散するわ」

面倒事なんてまっぴらごめんなの、と彼女はハイヒールの音を響かせて出て行った。

程なくして、青年が眼を開ける。

「……………腹が減った」

「…寝起きの第一声がそれか、お前は」

医務室。

簡素なベッドが並ぶその片隅。傍らの椅子に座っていた零が「呆れた」とため息をついた。

散らばる銀糸を鬱陶しげに払いのけ、祈響は視線を零へと移す。

「…何か変わったか？」

「いや、あれ以降『マリゴールド』の連中も動きを見せない」

「…ああ、それじゃなくて」

由良のこと、と青年は呟く。

「…別に変わりないと思うが」

聞いて、青年は動くのも億劫だと言わんばかりに浅く息を吐き、刹那眼を伏せた。

「…そうか。なら良い。あいつは不必要に自分を責めるところがあるから…少し心配だな」

「……珍しいな」

「ん？」

「お前が他人を心配することが、だ」

言われて、祈響は苦笑する。

「……同胞を心配するのは“当たり前”だろ？」

「……」

「まあ変わりないなら良いんだ。…水貰えるか」

喉が渴いて仕方がない、と祈響は言う。

踵を返す副長の背中に、祈響はふと訊いた。

「…駒が動かないのには、ふたつの理由が考えられるんだ」

「……は？」

無然とする零からグラスを受け取り、「『マリゴールド』を駒に見立てた比喻」と祈響は一拍置いてから続けた。

「一つ目は“動いたところで喰われるから”。二つ目は“今動くことに意味が無いから”」

分かるか？ と祈響は視線で問い、グラスを傾ける。

「今の『マリゴールド』は後者か」

「ご名答。だがここでひとつ矛盾が生じてる」

「矛盾？」

「そう。 “ 駒は自ら動けない ” だろう？」

全てを決めるのは騎手である“ 神 ”。

駒に役割や力は 有るが自ら動くなんてことは出来ないよ、と。

「つまりこのまま『マリゴールド』が動けば…均衡は崩れ、連中は“ 神 ” を裏切ることになるわけだ」

世界の均衡が崩れれば、“ 幻葬 ” は動かざるを得ない。

「… “ 神を引きずり出すつもり ” …とはそういうことか」

「ああ、恐らくな。だから余興として『ウチ』を選んだ。狙いが“ それ ” なら好都合だからな。……ッ」

痛みが断片的に襲って来るのか、青年が刹那呻く。

「…少々…疲れたな」

喋り過ぎたか、と祈響は苦笑。



「…だったら、今は休め。奴等が動いたら指揮を取るのはお前なんだから」

「…ああ、そうさせてもらうよ」

銀色が揺れ、白い波に沈んだ。

「アンタも大変ねえ、零君」

扉にもたれかかり、腕を組む専属医が言う。

「……」

「……飲む？」

片手で弄んでいたワインボトルを差し出すが、零は一言で切り捨てる。

「仕事中だ」

「相変わらず生真面目と言うかスティックと言うか…年がら年中そんなんじゃない疲れるでしょうに」

微笑して扉から背を離し、椅子に座る桜霞がふと白い波に沈む青年

を見やる。

「……『マリゴールド』、だっけ？ あの自己陶醉気味の指導者のとこでしょ。これも“革命”とやらな訳？」

「……ああ」

「なら相当自信アリみたいよ。切り口に無駄が一切無いわ。リーダーじゃなかったら喋ることは勿論、立つことも出来ないでしょうね。ホント、リーダーは凄イと思うわ、アタシ」

「……」

感心したように呟く桜霞を深緑の瞳で見据え、零は椅子から立ち上がる。

「あら、コーヒーでも飲んでいけば良いのに」

もう行くの？ と告げる専属医に視線だけで応じて、零は医務室を後にした。

\*

指導者補佐の自室。

ふわり、と吹き込んできた風に、由良は目を開けた。窓際。

褐色が揺れている。

え…？

「雄飛？」

「…久しぶりだよな、由良」

「どうして、ここに」

訊いて、由良は気付く。そして目を見開いた。

幼馴染の足元。

金色が、倒れている。

「ライカ…！」

駆け寄ろうとして、雄飛に止められる。

「雄飛が、やったの？」

「…うん。こうでもしないと、由良は話聞いてくれないだろ」

「だからって」

「…ごめん、由良」

少女の言葉を遮って、雄飛が呟く。

その刹那、首筋に微かな痛み。それが麻酔針だと気付く前に、体から力が抜けた。

ぐらり。

閉じていく視界に映ったのは、幼馴染の哀しみに歪んだ顔。

「ごめん」という言葉を最後に、視界がさらに塵気楼の様にぐにやりと歪む。

その瞬間、由良は急激に意識が堕ちて行くのを感じた。

ACT・13 夜想曲

「由良が居なくなつた？」

簡易ベッドに散らばる銀糸を払いのけ、祈響は赤の眼をす、と細める。

「……誘拐、か」

それがどういつた目的を以て行われたのかは分からないが、と祈響は呟いた。

「だがおおその見当はつく。仕組んだのは『マリゴールド』だろう？。」

「…おそらくな」

「ならば話は簡単だ。指導者補佐と引き換えに『マリゴールド』側に加勢しろ、とでも言つて来るんだろつさ」

『マリゴールド』が『雪月花』に仕掛けた“革命”。

中立である『ローズロイヤル』はさしずめ盤上のゲームを傍観するギャラリーと言つたところだな、と。

言つて、青年は上半身を起す。

「だがそのギャラリーが手駒に取れさえすれば……そのゲームは間違ひなく『マリゴールド』に傾く、という訳だ」

「……どうするつもりだ」

問う副長の言葉に、指導者は双眸を伏せる。

「……中立を破るつもりは無いさ。この戦争……仮に東雲が承諾したとしても『ローズロイヤル』はどちらの組織にも手を貸さない。……絶対な」

「ならばあいつを……由良を、どうするつもりだ」

「……オレは『全』と『一』、どちらかしか選べないとき、前者を選ぶしか出来ない立場に居る。……それくらい分かってるだろ、零」

開かれた左右異色の瞳が、一筋、揺らいだ。

\*

白い、壁。

体が、やけに重い。

意識を浮上させ、途切れた記憶をなんとか手繰り寄せる。

部屋に戻って。

いつのまにか眠っていて。

目が覚めたら視界にはライカと雄飛が居て。

それから

雄飛？

「  
っ」

反射的に無理矢理身を起こすと「わっ」と少年らしき声がする。

「びつくりした…目、覚めたのか、由良」

次第にはつきりしてくる視界。

そこに金色は無く、“生きて”いた頃と変わらない幼馴染の姿。

言葉を紡ごうとして、手元にスケッチブックが無いことに気付く。  
それを見透かしたように　ごく自然に、「はい」と相手がそれを差し出した。

「これ？」

軽く頷いてそれを受け取ると、相手が苦笑する。

「……そっか。やっぱり“こっち”の世界でも…声、無くしたままなんだな、由良」

今度は刹那躊躇って、由良は首肯する。

沈黙。

それを取り繕うように、少年が言う。

「まだ体ダルイだろ？ ゆっくりしてていいから。ここ、オレの自室だし」

言って、雄飛がしまった、という風に口を塞ぐ。苦虫を噛み潰したような表情で。

〔雄飛〕

「……ごめん、お前をここに無理矢理連れてきたことは謝る。でも、これしか手がなかった。お前だけは……」

〔私、だけ？ どういうこと？〕

「……あ…何でもないよ、由良が気にすることじゃない」

〔私を人質にするの？ 雄飛〕

「……表面上は、そういうことになると思う」

〔無駄だよ、雄飛。祈響は自分の意思は絶対曲げない。私を人質にしても、何もあの人の気持ちは変わらないから〕

「……『ローズロイヤル』指導者の意思は変わらなくても…『マリゴールド』指導者は違う」

〔え？〕



雄飛の言葉に由良が訊き返す。  
ふ、と苦笑して、雄飛は続けた。

「……あの人は、『ローズロイヤル』指導者の“背景”を狙ってる。それを手に入れる為なら、たとえ戦争を起こしても……たとえ相手が三大組織であろうと政府であろうと容赦なく狩るよ。あの人に敵う奴なんて居ないんだ」

「どついつこと？」

「“革命”に理由なんて要らないんだ。味方以外は『狩人』に狩られる。情けも、容赦も無く。だから……」

だから、と雄飛は呟く。

そして少女を　抱きしめた。

「雄飛……？」

「……お前だけは、あの人の獲物にしたくない。『マリゴールド』に居れば、『狩人』の眼は免れる」

その言葉の意味。

それは。

「祈響を……『ローズロイヤル』を裏切れってこと……？」

裏切る。

“指導者”である彼を。

その組織を。

「出来ないよ。私には、出来ない」

由良は小さくかぶりを振った。

「あの指導者を信じてるからか？ …… あんな、化け物を」

幼馴染の冷えた声音に、由良は体を強張らせる。

「違う。祈響は」

「何が違うんだよ。あの銀髪、あの赤い眼…… お前だって分かってんだろ？ あれは化け物だ……ッ」

強く抱き締められて、由良は言葉を失う。

不意に、雄飛が我に返ったように身を退いた。

「…あ、ごめん。急にこんなところに連れてきて、こんなこと言うて…混乱するに決まってるよな」

苦笑して雄飛は「ごめんな」と告げて立ち上がると踵を返した。

「…少し、頭冷やしてくる」

音を立てず閉じられた扉を見つめ、由良はスケッチブックを腕の中に抱いた。

どうしたらいいのだろう。

抜け出そうと思えば、今にでも抜け出せる。  
けれど。

“存命時代”の記憶が唐突によみがえる。

“最期”の日。

あの“生きた”最後の時。

雄飛は。

自分のせいで死んだ。

あの時の彼の表情は。

今も忘れられなくて。

雄飛を。

彼を。

もう二度と悲しませたくない。

私は、どうしたらいいのだろう。

\*

『ローズロイヤル』。

その医務室。

「……否が応でも動かないつもりか、祈響」

「……同じ事をお前は何回訊くんだ？ 零」

副長に渡された書類をめぐりながら、祈響は言う。

「中立のウチが相手を触発してどうする。それこそ被害が大きく成りかねない」

見たから判よろしく、と書類を渡し主に戻し、青年は簡易ベッドを降り、傍らの上着を羽織った。

「零、リハビリも兼ねて少しばかり歩いてくる。桜霞にそう言っておいてくれ」

踵を返す指導者に、副長は問う。

「……何処に行くんだ」

その言葉に、祈響はフ、と微笑んで、

「ライカのところ」

祈響は扉を開ける。

そこには「指導者補佐」と記されていた。

もともと、今はそこに主の姿は無く、ひとりの少年が俯き、佇んでいる。

「ライカ」

祈響は少年の名を呼ぶ。

金色が振り返り、その瞳と青年の視線が交わった。

「……………」

少年は沈黙したまま。

「…悔しいか？」

そう問う青年の言葉にも答えず、何処か上の空な表情だ。

「あいつを護れなかったことを責めるつもりは無い。お前が今どんな感情を抱いているかを聞きたいだけだ」

金色の瞳が僅かに揺らぐ。  
そして。

「くや、しい」

聞いて、「そうか」と祈響は微笑する。

「そう思うのなら、いつまでも此処で後悔する必要は無い。あの時、オレに向けた牙を…今度は自分の目的の為に磨けばいいだけのことだ」

「もくてき？」

「ああ。自分が今何をしたらいいのか、何が出来るのか…：他人がどう言おうとそれを決めるのは自分だ。誰の為でもない、自分の目的の為に果たせれば、結果は伴う」

「……ライカでも、できる？」

「出来るさ。お前の“想い”が本物ならな」

「……うん」

楽しみにしてるよ、と“指導者らしく”微笑んで、祈響が踵を返すところで、

「 ヨラが」

ライカが、告げる。

「……泣いてた」

「……」

「でも抵抗しなかった。最後に、ライカに言おうとした。

“ごめんね”って」

「……………そうか」

ふ、と笑みを唇にだけ浮かべて、祈響は言う。

その赤の眼が、静かに揺らいだ。

\*

「マリーゴールド？」

「うん。あの人の奥さんが好きだったとかで、中庭にあるんだよ」

綺麗だろ、と雄飛が微笑む。

変わらない笑み。

“光の時代”と。

「“存命時代”のものと全く一緒ってわけには流石にいかなかったらしいけど。でも、こっやって形に残せるのって幸せだよな」

「…うん」

由良は頷く。

形に残せる想いほどこの世界で幸福なものはない。  
だから、住人は「形」に残そうとする習性があると聞いたことがあ  
った。

少しでも長く、それを近くで感じていられるように。  
少しでも多く、がらんどうな心を満たす為に。

「……由良」

咳くように、花を見つめたままの雄飛が言う。

「もう“生きて”た頃には戻れないけどさ。今ならオレ、この手で  
由良を護れる。護ってみせるよ」

褐色の瞳が、少女へと向けられる。

「……性急過ぎるのも分かってる。でももう時間が無いんだ、だから  
だから、と。」

「選んで。『マリゴールド』に来るか、『ローズロイヤル』  
に留まるか」

言って、少年が苦笑する。



「即答しなくて良いから。そんなすぐに決められないよな」  
部屋戻ろうか、と促す相手の後を追いつ、由良は“呟く”。

「  
」

音にならない“声”。

“光”と共に失くした、声。

やっぱり駄目だな、と苦笑する。

言えない代わりに、藍色の瞳を刹那伏せた。

心の内で、もう一度、そつと呟く。

“ごめんね”。

きつと、また。  
私は。

誰かを楯に護られる。

だから。

だから、私は。

\*

コツ、と靴音が一段と響く。

祈響は半壊した事務室の扉を開け、微笑する。

「戻ってたのか」

ふと言葉を掛ける先。

背後の少女に、そう笑いかける。

「由良」

少女の藍色の髪が揺れ、その瞳が真っ直ぐに青年の背中を見つめる。

そしてその手のひらから。

白く煌く得物が放たれた。

青年の銀髪が一糸、床に落ちる。

けれど青年は振り向かない。

「…成程」

得物である“それ”を片手で捉え、祈響は冷笑。

「これがお前の“答え”と言つことか」

「ごめんなさい」

「謝られる義理は持ち合わせてないさ。オレが慈悲深い男じゃないことはお前も知ってるだろ？」

刹那の沈黙。

やがて踵を返して駆け出していった少女をほんの僅か一瞥し、祈響は眼を細めた。

『ローズロイヤル』医務室。

無駄の無い動きで書類を片付けている副長を横目で見やり、青年は何処か諦めたように言葉を紡いだ。

「……零、やはりそろそろ本気で気が狂いそうだ」

眉を顰める相手に少女の得物を手渡すと、左右異色の双眸が伏せられる。

それを見た深緑の瞳が僅か見開かれた。

「ッ、お前…ッ」

「ああ、会ったよ。他ならぬ由良に」

もっとも、もう居ないがな、と呟く指導者に零は言つ。

「何故引き留めなかった」

「それがあいつの意思だからだよ」

「……！」

冷えた声音。銀色が赤と黒を覆い隠す。

「……“指導者”であるオレに得物を向けた。その意味はあいつだつて十分わかつてるだろうさ」

分かっていて、“それ”を行ったのだ、と、祈響は告げる。そして続けた。

「……由良は、この組織を抜ける」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9873g/>

---

永遠に葬れ

2010年10月10日06時27分発行